

春琴抄

谷崎潤一郎

青空文庫



春琴、ほんとうの名はもずやくと鴟屋琴、大阪道修町どしやうまちの薬種商の生れで
ぼつねん歿年は明治十九年十月十四日、墓は市内下寺町のじやうどしゆう浄土宗の
ぼうじ某寺にある。せんだつて通りかかりにお墓参りをする気になり立
よち寄つて案内を乞うと「鴟屋さんの墓所はこちらでございます」
 といつて寺男が本堂のうしろの方へ連れて行つた。見るとひとむら叢
つばきの椿の木かげに鴟屋家代々の墓が数基ならんでいるのであつたが
 琴女の墓らしいものはそのあたりには見あたらなかつた。むかし
 鴟屋家の娘むすめにしかじかの人があつたはずですがその人のはという

としばらく考えていて「それならあれにありますのがそれかも分りませぬ」と東側の急な坂路になつてゐる段々の上へ連れて行く。知つての通り下寺町の東側のうしろには生国魂神社のある高台が聳そびえているので今いう急な坂路は寺の境けいだい内からその高台へつづく斜しやめん面なのであるが、そこは大阪にはちよつと珍めづらしい樹木の繁しげつた場所であつて琴女の墓はその斜面の中腹を平らにしたささやかな空地あきちに建つていた。光誉春琴恵照禅定尼、と、墓石の表面に法名を記し裏面に俗名鴟屋琴、号春琴、明治十九年十月十四日歿、行ぎやうねん年五拾八歳とあつて、側面に、門人温井ぬくい佐助建之と刻してある。琴女は生しやうがい涯がい鴟屋姓せいを名のつていたけれども「門人」温井けんぎやう檢けんぎやう校こうと事実上の夫婦生活ふうふうふをいとなんでいたのでかく鴟屋

家の墓地と離れたところへ別に一基を選んだのであろうか。寺男の話では鴟屋の家はとうに没落してしまい近年は稀に一族の者がお参りに来るだけであるがそれも琴女の墓を訪うことはほとんどないのでこれが鴟屋さんの身内のお方のものであろうとは思わなかったという。するとこの仏さまは無縁になつて居るのですかという、いえ無縁という訳ではありませんね萩の茶屋の方に住んでおられる七十恰好の老婦人が年に一二度お参りに来られます、そのお方はこのお墓へお参りをされて、それから、それにここに小さなお墓があるでしょうと、その墓の左脇にある別な墓を指し示しながらきつとそのあとでこのお墓へも香華を手向けて行かれますお経料などもそのお方がお上げになりますという。寺男

が示した今の小さな墓標の前へ行つて見ると石の大きさは琴女の墓の半分くらいである。表面に眞誉琴台正道信士と刻し裏面に俗名温井佐助、号琴台、鴟屋春琴門人、明治四十年十月十四日歿、行年八拾三歳とある。すなわちこれが温井検校の墓であつた。萩の茶屋の老婦人というのは後に出て来るからここには説くまいだこの墓が春琴の墓にくらべて小さくかつその墓石に門人である旨を記して死後にも師弟の礼を守つているところに検校の遺志がむねある。私は、おりから夕日が墓石の表にあかあかと照つていおかるの丘の上にたたずんで脚下にひろがる大大阪市の景観を眺めた。けだしこのあたりは難波津なにわづの昔からある丘きゆうりよう陵地帯で西向きの高台がここからずっと天王寺てんのうじの方へ続いている。そして現在では煤ば

いえん 煙で痛めつけられた木の葉や草の葉に生色がなく埃まびれに立
 ち枯れた大木が殺風景な感じを与えるがこれらの墓が建てられ
 た当時はもつと鬱蒼としていたであらうし今も市内の墓地とし
 てはまずこの辺が一番閑静で見晴らしのよい場所であらう。奇
 しき因縁に纏われた二人の師弟は夕靄の底に大ビルディング
 が数知れず屹立する東洋一の工業都市を見下しながら、永久に
 ここに眠っているのである。それにしても今日の大阪は検校が在
 りし日の倂をとどめぬままでに変わってしまったがこの二つの墓石の
 みは今も浅からぬ師弟の契りを語り合っているように見える。元
 来温井検校の家は日蓮宗であつて検校を除く温井一家の墓は
 検校の故郷江州日野町の某寺にある。しかるに検校が父祖

代々の宗しゅうし 旨を捨てて浄土宗に換かえたのは墓になつても春琴女の側そばを離れまいという殉じゆんじょう情から出たもので、春琴女の存生中、早くすでに師弟の法名、この二つの墓石の位置、釣つりあ合い等が定められてあつたという。目分量で測つたところでは春琴女の墓石は高さ約六尺、檢校のは四尺に足らぬほどであろうか。二つは低い石しだたみ 登だんの壇の上に並んで立っていて春琴女の墓の右脇みぎわきにひと本もとの松まつが植えてあり緑の枝が墓石の上へ屋根のように伸びているのであるが、その枝の先が届かなくなつた左の方の二三尺離れたところに檢校の墓が鞣きつきゆうじよ躬加じぎとして侍坐じざするごとく控ひかえている。それを見ると生前檢校がまめまめしく師つかに事かえて影かげの形かに添そうように扈こしやう従じゆしていた有し様がの俣ばれあたかも石いにれいがあつて今日も

なおその幸福を楽しんでいるようである。私は春琴女の墓前に跪ひざまずいて恭うやうやしく礼をした後、検校の墓石に手をかけてその石の頭を愛撫あいぶしながら夕日が大市街のかなたに沈しずんでしまふまで丘の上に低ていか徊わいしていた



近ちかごろ頃私の手に入れたものに「鴟屋春琴伝」という小冊子があり、これが私の春琴女を知るに至った端たんちよ緒であるがこの書は生漉きずきの和紙へ四号活字で印刷した三十枚ほどのもので察するところ春琴女の三回忌きに弟子の検校が誰だれかに頼んで師の伝記を編ませ配り

物にでもしたのであろう。されば内容は文章体で綴つてあり検校のことも三人称しやうで書いてあるけれども恐らく材料は検校が授けたものに違いなくこの書のほんとうの著者は検校その人であるとして差支さしつかえあるまい。伝によると「春琴の家は代々鴟屋安左衛門やすざえもんを称し、大阪道修町に住して葉種商を営む。春琴の父に至りて七代目也なり。母しげ女は京都麩屋町ふやちやうの跡部氏あとべの出にして安左衛門に嫁かし二男四女を挙ぐ。春琴はその第二女にして文政十二年五月二十四日をもつて生るうま」とある。また曰くいわ、「春琴幼にして穎悟えいご、加うるに容姿端麗ようしたんれいにして高雅なること譬えんに物なし。四歳の頃より舞まいを習いけるに举措進退きよその法自ら備わりてさす手ひく手の優艶ゆうえんなること舞妓まいこも及ばぬほどなりければ、師もしばしば舌を

巻きて、あわれこの児こ、この材と質とをもつてせば天下きようめに嬌め
 名いを謳うたわれんこと期して待つべきに、良家の子女に生れたるは
 幸とや云わん不幸とや云わんと眩つぶやきしとかや。また早くより読み
 書きの道を学ぶに上達すこぶる速すみやかにして二人の兄をさえ凌りようが駕が
 したりき」と。これらの記事が春琴を視みること神のごとくであつ
 たらしい検校から出たものとすればどれほど信を置いてよいか分
 らないけれども彼女の生れつきの容貌ようぼうが「端麗にして高雅」で
 あつたことはいろいろな事実から立証される。当時は婦人の身長
 が一体に低かつたようであるが彼女かのじよも身の丈たけが五尺みに充みたず顔
 や手足の道具が非常に小作りで繊細せんさいを極めていたという。今日
 伝わっている春琴女が三十七歳の時の写真というものを見るのに、

りんかく
輪郭の整った瓜実顔に、一つ一つ可愛い指で摘まみ上げたよ
うな小柄こがらな今にも消えてなくなりそうやわらな柔かな目鼻がついている。
なにぶん
何分にも明治初年か慶応けいおう頃の撮影さつえいであるからとところどころ
に星が出たりして遠い昔の記憶きおくのごとくうすれているのでそのた
めにそう見えるのもあろうが、その朦朧もうろうとした写真では大阪
の富裕ふゆうな町家の婦人らしい気品を認められる以外に、うつくしい
けれどもこれという個性ひらの閃めきがなく印象きやくの稀薄な感じがする。
年かつこう恰好も三十七歳といえはそうも見えまた二十七八歳のように
も見えなくはない。この時の春琴女はすでに両眼めいの明を失つてか
ら二十有余年の後であるけれども盲目もうもくというよりは眼をつぶつ
ているという風に見える。かつて佐藤春夫が云ったことに聾者ろうしゃ

は愚人ぐじんのように見え盲もうじん人は賢者けんじやのように見えるという説があ
 った。なぜならつんぽは人の云うことを聴きこうとして眉まゆをしかめ
 眼や口を開け首を傾かたむけたり仰向あおむけたりするので何となく間の抜ぬけ
 たところがあるしかるに盲人はしずかに端坐たんざして首をうつ向け、
 瞑目めいもく沈思ちんしするかのごとき様子をするからいかにも考え深そうに
 見えるというのであつて果して一般に当て籤はまるかどうか分らな
 いがそれは一つには仏菩薩ぶつぼさつの眼、慈眼じげん視衆生ししゆじようという慈眼なる
 ものは半眼に閉じた眼であるからそれを見馴みれているわれわれは
 開いた眼よりも閉じた眼の方に慈悲ありがたや有難ありがたみを覚えある場合に
 は畏おそれを抱いだくのであろうか。されば春琴女の閉じた眼まぶた瞼まぶたにもそれ
 が取り分け優しい女人であるせいにか古い絵像の觀世音かんぜおんを拜まじんだ

ようなほのかな慈悲を感ずるのである。聞くところによると春琴女の写真は後にも先にもこれ一枚しかないのであるという彼女が幼少の頃はまだ写真術が輸入されておらずまたこの写真を撮った同じ年に偶然ある災難が起りそれより後は決して写真などを写さなかつたはずであるから、われわれはこの朦朧たる一枚の映像をたよりに彼女の風貌を想見するより仕方がない。読者は上述の説明を読んでどういう風な面立ちを浮かべられたか恐らく物足りないないぼんやりしたものを中心に描かれたであろうが、仮りに実際の写真を見られても格別これ以上にはつきり分るといふことはなからうあるいは写真の方が読者の空想されるものよりもつとぼやけているでもあろう。考えてみると彼女がこの写真をうつした年

すなわち春琴女が三十七歳のおりに検校もまた盲人になったのであつて、検校がこの世で最後に見た彼女の姿はこの映像に近いものであつたかと思われる。すると晩年の検校が記憶きおくの中に存していた彼女の姿もこの程度にぼやけたものではなかつたであらうか。それとも次第しだいにうすれ去る記憶を空想で補つて行くうちにこれとは全然異なつた一人の別な貴い女にょにん人を作り上げていたであらうか

○

春琴伝は続けて曰くいわ、「されば両親も琴女を視みること 掌しょうちゆう 中の

珠たまのごとく、五人の兄妹達に超こえて唯ひとりこの児こを寵ちようあい愛あいしけるに、琴女九歳の時不幸にして眼疾がんしつを得、幾いくばくもなくしてついに全く両眼の明を失いければ、父母の悲歎ひたん大方ならず、母は我が児の不憫ふびんさに天を恨うらみ人を憎にくみて一時狂きようせるがごとくなりき。春琴これより舞技を断念して専もつぱら琴三絃さんげんの稽古けいこを励はげみ、糸竹の道を志すに至りぬ」と。春琴の眼疾というのは何であつたか明かでない伝にもこれ以上の記載きざいがないが後に検校が人に語つてまことに喬きようぼく木は風かぜに妬ねたまれるとやら、お師匠ししやうさまは器量きりやうや芸能が諸人にすぐれておられたばかりに一生のうちに二度までも人の嫉ねたみをお受けなされたお師匠さまの御不運は全くこの二度のご災難のお蔭かげじやと云つたのを思い合わせれば、何かその間に事情が

伏ふくぎ在ざいするようでもある。検校はまたお師匠さまのは風眼であつ
 たとも云つた。春琴女は甘あまやかされて育つたために驕きょう慢まんなど
 ころはあつたけれども言語動作が愛あい嬌きょうに富み目下の者への思
 いやりが深く加うるに至つて花やかな陽気な性質であつたから、
 人あたりもよく兄弟仲も睦むつま一家中の者に親しまれたが一番末
 の妹に附ついていた乳母うばが両親の愛情の偏へん頗ぱなのを憤いきどおつて密ひそかに琴
 女を憎にくんでいたという。風眼というものは人も知るごとく花柳かりゆう
 病びょうの黴ばい菌きんが眼の粘ねん膜まくを侵おかす時に生ずるのであるから検校の
 意は、けだしこの乳母がある手段をもつて彼女を失明させたこと
 を諷ふうするのである。しかし確かな根こん拠きよがあつてそう思うのか検
 校一人だけの想像説であるのか明めい瞭りょうでない。春琴女が後年の

烈はげしい気象を見ればあるいはそういう事実が性格に影えいきよう響きようを及
 ぼしたのかとも猜さいせられなくはないがこの事に限らず檢校の説に
 は春琴女の不幸なげを歎なげくあまり知らず識しらず他人を傷つけ呪のろうよう
 な傾かたむきがありにわかにごとごとくを信ずる訳に行かない乳母の一
 件なども恐らくは揣摩臆測しまおくそくに過ぎないであろう。要するにここで
 はあえて原因を問わずただ九歳の時に盲目になつたことを記せば
 足りる。そして「これより舞技を断念して専ら琴三絃の稽古を励
 み、糸竹の道を志」した。つまり春琴女が思いを音おんぎよく曲きょくにひそ
 めるようになったのは失明した結果だということになり彼女自身
 も自分のほんとうの天分は舞にあつた、わたしの琴や三味線しやみせんを
 褒ほめる人があるのはわたしというものを知らないからだ眼さえ見

えたら自分は決して音曲の方へは行かなかつたのにと常に檢校に
 述懐じゆつかいしたという。これは半面に自分の不得意な音曲でさえこ
 のくらいに出来るという風に聞え彼女の驕慢な一端いつたんが窺うかがわれる
 がこの言葉なども多少檢校の修飾しゆうしよくが加わつてはいはしないか少
 くとも彼女が一時の感情に任せて発した言葉を有難く肝きもに銘めいじて
 聴き、彼女を偉えらくするために重大な意味を持たせた嫌きらいがありは
 しないか。前掲ぜんげいの萩の茶屋に住んでいる老婦人というのは鳴しぎさ
 沢わてるといい生田流いくたの勾当こうとうで晩年の春琴と温井檢校に親しく
 仕えた人であるがこの勾当の話こうとうを聞くに、お師匠さま「春琴のこ
 と」は舞がお上手じょうずだったそうにござりますが琴や三味線も五つ
 六つの時分から春松という檢校さんに手ほどきをしておもらいな

されそれからずっと稽古を励んでおられました、それ故盲目になつてから始めて音曲を習われたのではないのでござります、よいお内の娘さん方は皆早くから遊芸のけいこをされますのがその頃の習慣でござりましたお師匠さまは十の歳にあのむずかしい「残月」の曲を聞き覚えて独りで三味線にお取りなされたと申します。そうしてみれば音曲の方にも生れつきの天才を備えておられたのでござりましょうなかなか凡人には真似られぬこととござりませぬただ盲目になられてからは外に楽しみがござりませぬので一層深くこの道へお這入りなされ、精魂を打ち込まれたのかとぞんじますとのことである。多分この説の方がほんとうなので彼女の真の才能は実は始めより音楽に存したのであろう舞踊の方は

果してどの程度であつたか疑わしく思われる

○

音曲の道に精魂を打ち込んだとはいふものの生計の心配をする身分ではないから最初はそれを職業にしようというほどの考かんがえはなかつたであろう後に彼女が琴曲の師匠として門戸を構えたのは別種の事情がそこへ導いたのであり、そうなつてからでもそれで生計を立てたのではなく月々道修町どしやうまちの本家から仕送る金子きんすの方が比較かくにならぬほど多額だつたのであるが、彼女の驕奢きやうしやと贅沢ぜいたくとはそれでも支えきれなかつた。されば始めは格別将来の目算も

なくただ好きにまかせて一生懸命に技を研いたのであろうが天
 稟んぴんの才能に熱心が拍車はくしゃをかけたので、「十五歳の頃春琴の技
 大いに進みて儕輩さいはいを抽ぬきんで、同門の子弟にして実力春琴に比肩ひけん
 する者一人もなかりき」とあるのは恐らく事実であろう。鳴沢勾
 当いわ曰くお師匠さまがいつも自慢じまんをされましたのに春松檢校は随ずいぶ
 分ん稽古きこが厳きびしいお方だったけれど、わたしは身に沁しみて叱しかられ
 たということがなかった褒ほめられたことの方が多かった、私が行
 くとお師匠さんは必ずご自分で稽古をつけて下されそれはそれは
 親切に優しく教えて下さるのでお師匠さんを怖こわがる人たちの気が
 知れなんだということでござります、でござりますから修行の苦
 しみというものを知らずにあれまでにおなりなされたのは天品だ

ったのでござりましょうと。けだし春琴は鴉屋のお嬢様じようであるか
 らいかに厳格な師匠でも芸人の児を仕込むような烈はげしい待たい遇ぐうを
 する訳に行かない幾分か手心を加えたのであろうその間にはまた、
 千金の家に生れながら不幸にして盲目となつた可憐かれんな少女を庇護ひご
 する感情もあつたらうけれども何よりも師の検校は彼女の才を愛
 し、それに惚ほれ込こんだのであつた。彼は我が児以上に春琴の身を
 案じたまたま微恙びようで欠席する等のことがあれば直つちに使つかを道修町
 に走らせあるいは自ら杖つえを曳ひいて見舞みまつた。常に春琴を弟子に持
 っていることを誇ほこりとして人に吹ふい聴ちようし玄くろう人筋の門弟たちが
 大勢集まつている所でお前達は鴉屋のこいさんの芸を手本とせよ
 「注、大阪では「お嬢さん」のことを「糸いとさん」あるいは「とう

さん」といい姉娘に対して妹娘を「小糸こいとさん」あるいは「こいさん」などと呼び分けること現在もしかり。春松検校は春琴の姉にも手ほどきをしたことあり家庭的に親しかつたので春琴をかく呼んだのであろう」今に腕うで一本で食べて行かなければならない者が素人しろうとのこいさんに及ばないようでは心細いぞといった。また春琴をいたわり過ぎるといふ批難ひなんがあつた時何をいふぞ師たる者が稽古をつけるには厳しくするこそ親切なのじゃわしがあの児を叱らぬのはそれだけ親切が足らぬのじゃあの児は天性芸道に明るく悟りさとが速いから捨て置いて進む所までは進む本気で叩たたき込こんだらばいよいよ後こうせい生せい畏おそろしい者になり本職の弟子共が困るであらう、何も結構な家に生れて世過よすぎに不自由のない娘をそれほど

に教え込まずとも鈍根どんこんの者をこそ一人前に仕立ててやろうと力ちからをこぼこぼを入れていのに、何という心得違いをいうぞといった

○

春松検校の家は鞆うつぼにあつて道修町の鴉屋の店からは十丁ほどの距き離よりであつたが春琴は毎日丁稚でっちに手を曳ひかれて稽古に通つたその丁稚といふのが当時佐助と云つた少年で後の温井検校であり、春琴との縁がかくして生じたのである。佐助は前に述べたごとく江州日野の産であつて実家はやはり薬屋を営み彼の父も祖父も見習い時代に大阪に出て鴉屋に奉公をしたことがあるという鴉屋は実に

佐助に取つて累代るいだいの主家であつた。春琴より四つ歳上で十三歳の時に始めて奉公に上つたのであるから春琴が九つの歳すなわち失明した歳に当るが彼が来た時は既に春琴の美しい瞳ひとみが永久に鎖とぎされた後であつた。佐助はこのことを、春琴の瞳の光を一度も見なかつたことを後年に至るまで悔くいていないかえつて幸福であるとした。もし失明以前を知つていたら失明後の顔が不完全なものに見えたらうけれども幸い彼は彼女の容貌に何一つ不足なものを感じなかつた最初から円満具足した顔に見えた。今日大阪の上流の家庭は争つて邸宅ていたくを郊外こうがいに移し令嬢れいじようたちもまたスポーツに親しんで野外の空気や日光に触ふれるから以前のような深窓の佳人かじん式箱入娘はいなくなつてしまつたが現在でも市中に住んでい

る子供たちは一般に体格がせんじやく纖弱で顔の色なども概がいして青白いいなか田舎育ちの少年少女とは皮膚ひふの冴さえ方が違う良く云えば垢あかぬ抜けがしているが悪く云えば病的である。これは大阪に限ったことではなく都会の通有性だけでも江戸では女でも浅黒いのを自慢にしたくらいで色の白きは京阪に及ばない大阪の旧家に育ったぼんちなどは男でさえ芝居しばいに出て来る若旦那わかだんなそのままにきやしやで骨細なのがあり、三十歳前後に至つて始めて顔あかが赭あかく焼けて来て脂肪しぼうをたたえ急に体が太り出して紳士しんし然たる貫かんろく禄ろくを備えるようになるその時分までは全く婦女子も同様に色が白く衣服の好みも随分柔に弱ゆうじやくなのである。まして旧幕時代の豊かな町人の家に生れ、非衛生的な奥おくふか深い部屋こに垂たれ籠こめて育つた娘たちの透すき徹とるよう

な白さと青さと細さとはどれほどであったか田舎者の佐助少年の眼にそれがいかばかり妖しく艶に映ったか。この時春琴の姉が十二歳すぐ下の妹が六歳で、ぽつと出の佐助にはいずれも鄙には稀な少女に見えた分けても盲目の春琴の不思議な気韻に打たれたという。春琴の閉じた眼瞼が姉妹たちの開いた瞳より明るくも美しくも思われてこの顔はこれでなければいけないのだこうあるのが本来だという感じがした。四人の姉妹のうちで春琴が最も器量よしという評判が高かったのは、たといそれが事実だとしても幾分か彼女の不具を憐れみ惜しむ感情が手伝っていたであろうが佐助に至ってはそうでなかった。後日佐助は自分の春琴に対する愛が同情や憐愍から生じたという風に云われることを何よりも

厭いといそんな觀察をする者があると心外千万であるとした。わしは
 お師匠様のお顔を見てお気の毒とかお可哀かわいそうとか思つたことは
 一いっぺん 遍もないぞお師匠様に比べると眼明きの方がみじめだぞお師
 匠様があのご氣象とご器量で何で人の憐れみを求められよう佐助
 どんは可哀そうじやとかえつてわしを憐れんで下すつたものじや、
 わしやお前達は眼鼻そろが揃そろつていただけで外ほかの事は何一つお師匠様
 に及ばぬわしたちの方が片羽ではないかと云つた。ただしそれは
 後の話で佐助は最初燃えるような崇すう拜はいの念を胸の奥底に秘めな
 がらまめまめしく仕えていたのであろうまだ恋れん愛あいという自覚は
 なかったであらうし、あつても相手は頑がん是ぜないこいさんである上
 に累代の主家のお嬢様である佐助としてはお供の役を仰おせ付おかつ

て毎日一いっしょ緒に道を歩くことの出来るのがせめてもの慰なぐさめであつただろう。いつたい新参の少年の身をもつて大切なお嬢様の手て曳びきを命ぜられたというのは変なようだが始めは佐助に限っていたのではなく女中が附いて行くこともあり外の小僧や若僧が供をすることもありいろいろであつたのをある時春琴が「佐助どんにしてほしい」といつたのでそれから佐助の役に極きまつたそれは佐助が十四歳になつてからである。彼は無上の光榮に感かん激げきしながらいつも春琴の小さな掌てのひらを己おのれの掌の中に収めて十丁の道のりを春松検校の家に行き稽古の済むのを待つて再び連もどれて戻るのであつたが途中春琴はめつたに口を利いたことがなく、佐助もお嬢様が話しかけて来ない限りは黙もく々もくとしてただ過ちのないように気を

配った。春琴は「何でこいさんは佐助どんがええお云いでしたんでつか」と尋ねる者があつた時「誰よりもおとなしゆうていらんこと云えへんよつて」と答えたのであつた。元來彼女は愛嬌に富み人あたりが良かったことは前に述べた通りだけでも失明以來氣むずかしく陰鬱いんうつになり晴れやかな声を出すことや笑うことが少く口が重くなつていたので、佐助が余計なおしやべりをせず役目だけを大切に勤めて邪魔じやまにならぬようにしている所が氣に入つたのであるかも知れない「佐助は彼女の笑う顔を見るのが厭いやであつたというけだし盲人が笑う時は間が抜けて哀れあわに見える佐助の感情ではそれが堪たえられなかつたのであろう」



おしやべりをしないから邪魔にならぬからというのが果して春琴の真意であつたか佐助の憧憬しょうけいの一念がおぼろげに通じて子供ながらもそれを嬉うれしく思つたのではなかつたか十歳の少女にそういうことは有り得ないとも考えられるが、俊敏しゅんびんで早熟そうじゆくの上上に盲目になつた結果として第六感の神経が研とぎ澄すまされてもいたことを思うと必ずしも突飛とつぴな想像であるとはいえない氣位の高高い春琴は後に恋愛を意識するようになってからでも容易に胸中を打ち明けず久しい間佐助に許さなかつたのである。さればそこに多少の疑問はあるけれどもとにかく始め佐助というものの存在は

ほとんど春琴の念頭にないかのごとくであつた少くとも佐助には
そう見えた。手曳きをする時佐助は左の手を春琴の肩かたの高さに捧ささぎ
げて掌を上に向けそれへ彼女の右の掌を受けるのであつたが春琴
には佐助というものが一つの掌に過ぎないようであつたたまたま
用をさせる時にもしぐさで示したり顔をしかめてみせたり謎なぞをか
けるようにひとりごとを洩もらしたりしてどうせよこうせよとはつ
きり意志を云い現わすことはなく、それを気が付かずにいると必
ず機嫌きげんが悪いので佐助は絶えず春琴の顔つきや動作を見落さぬよ
うに緊きんちよう張ちやうしていなければならずあたかも注意深さの程度を試
されているように感じた。もともと我が儘まなお嬢様育ちのところ
へ盲人に特有な意地悪さも加わつて片時も佐助に油断いとまする暇を与

えなかつた。ある時春松檢校の家で稽古の順番が廻まわつて来るのを待つている間にふと春琴の姿が見えなくなつたので佐助が驚おどろいてその辺を捜さがすと知らぬ間に厠かわやに行つていたのであつた。いつも小用に立つ時には黙つて春琴が出て行くのをそれと察して追いかけるながら戸口まで手を曳いて連れて行き、そこに待つていて手水ちようずの水をかけてやるのに今日は佐助がうっかりしていたのでそのまま独ひとり手さぐりで行つたのである。「済まんことでござりました」と佐助は声をふるわせながら、厠から出て手水鉢ぼちの柄杓ひしゃくを取ろうと手を伸のばしている少女の前に駈かけて来て云つたが春琴は「もうええ」と云いつつ首を振ふつた。しかしこういう場合「もうええ」といわれても「そうでござりますか」と引き退さがつては一層後がい

けないのである無理にも柄杓をもぎ取るようにして水をかけてやるのがコツなのである。またある夏の日の午後に順番を待つている時うしろに畏かしこまって控ひかえていると「暑い」と独ひとりごとを洩ひらした「暑うござりますなあ」とおあいそを云つてみたが何の返事もせずしばらくするとまた「暑い」という、心づいて有り合わせた団扇うちわを取り背中の方からあおいでやるとそれで納なつとく得とくしたようであつたが少しでもあおぎ方が気が抜けるとすぐ「暑い」を繰くり返かえした。春琴の強情と氣儘きままとはかくのごとくであつたけれども特に佐助に対する時がそうなのであつていずれの奉公人ほうこうにんにもという訳ではなかつた元来そういう素質があつたところへ佐助が努めて意を迎えるようにしたので、彼に対してのみその傾けいこう向こうが極端に

なつて行つたのである彼女が佐助を最も便利に思つた理由もここにあるのであり佐助もまたそれを苦役と感ぜずむしろ喜んだのであつた彼女の特別な意地悪さをあま甘えられているように取り、一種のおんちよう恩寵のごとくに解したのでもあろう

○

春松検校が弟子でしに稽古をつける部屋は奥の中二階にあつたので佐助は番が廻つて来ると春琴を導いて段梯子だんぼしごを上り検校とさし向いの席に直らせて琴なり三味線なりをその前に置き、いったん控え室へ下さがつて稽古の終るのを待ち再び迎えに行くのであるが待つ

ている間ももう済む頃かと油断なく耳を立てていて済んだら呼ば
 れない中うちに直ただちに立って行くようにしたされば春琴の習っている
 音曲が自然と耳につくようになるのも道理である佐助の音楽趣味しゅみ
 はかくして養われたのであった。後年一流の大家になった人であ
 るから生れつきの才能もあつたらうけれどももし春琴に仕える機
 会を与えられずまた何かにつけて彼女に同化しようとする熱烈ねつれつ
 な愛情がなかつたならば、恐らく佐助は鴟屋のれんの暖簾のれんを分けてもら
 い一介いっかいの薬種商として平凡へいぼんに世を終つたであろう後年盲目と
 なり検校の位を称してからも常に自分の技は遠く春琴に及ばずと
 為なし全なくお師匠様の啓けい発はつによつてここまで来たのであるといつ
 ていた。春琴を九天の高さに持ち上げ百歩も二百歩も謙へりくだつていた

佐助であるからかかるといふ言葉をそのまま受け取る訳には行かないが、
 技の優劣ゆうれつはとにかくとして春琴の方がより天才肌てんさいはだであり佐助
 は刻苦精せいい励いする努力家であつたことだけは間違ひがあるまい。
 彼が密ひそかに一いっちよう挺ていの三味線を手に入れようとして主家から給さ
 れる時々の手あてや使い先で貰もらう祝儀しゅうぎなどを貯金し出したのは
 十四歳の暮くれであつて翌年の夏ようよう粗末そまつな稽古三味線を買ひ求
 めると番頭ばんとうに見咎みとがめられぬように棹さおと胴どうとを別々に天井裏てんじようらの
 寝部屋ねべやへ持ち込み、夜な夜な朋輩ほうばいの寝静まるのを待つて独り稽
 古をしたのである。しかし当初は、父祖の業を継つぐ目的で丁稚奉
 公に住み込んだ身の将来これを本職にしようという覚悟かくごも自信も
 あつたのではなかつたただ春琴に忠実である余り彼女の好むとこ

ろのものを己おのれも好むようになりそれが昂こうじた結果であり音曲をもつて彼女の愛を得る手段に供しようなどの心すらもなかつたことは、彼女にさえ極力秘していた一事をもつて明かである。佐助は五六人の手代や丁稚共と立つと頭がつかえるような低い狭せまい部屋へ寝るので彼等かれらの眠りねむを妨さまたげぬことを条件として内証うちしょうにしておいてくれるように頼んだ。幾いくら眠つても寝足りない年頃としごろの奉公人共は床に這入るとたちまちぐっすり寝入ってしまうから苦情をいう者はいなかつたけれども佐助は皆が熟じゆくすい睡すいするのを待つて起き上り布団ふとんを出したあとの押入おし入れの中で稽古をした。それでなくても天井裏は蒸し暑いのに押入の中の夏の夜の暑さは格別であったに違ちがひないがこうすると絃げんの音の外へ洩れるのを防ぐことが

出来、いびき 鼾いびきごえや寝言など外部の音おんきよう響おんきようをも遮断しやだんするに都合が
 好かつたもちろん爪弾つまびきで撥ばちは使えなかつた燈火のない真まつ暗くらな
 所で手さぐりで弾くのである。しかし佐助はその暗闇くらやみを少しも
 不便に感じなかつた盲目の人は常にこう云う闇の中くらやみにいるこいさ
 んもまたこの闇の中で三味線を弾きなさるのだと思うと、自分も
 同じ暗黒世界に身を置くことがこの上もなく楽しかつた後に公然
 と稽古することを許可されてからもこいさんと同じにしなければ
 濟まないと云つて楽器を手にする時は眼をつぶるのが癖くせであつた
 つまり眼明きでありながら盲目の春琴と同じ苦難なを嘗なめようとし、
 盲人くらやの不自由な境きようがい涯きようがいを出来るだけ体験しようとして時には盲
 人を羨うらやむかのごとくであつた彼が後年ほんとうの盲人になつたの

は実に少年時代からのそういう心がけが影響しているので、思えば偶然ぐうぜんでないのである



いずれの楽器も蘊うん奥おうを極めることのむずかしさは同一であろうがヴァイオリンと三味線とはツボに何の印もなくかつ弾だん奏そうの度たびごとに絃げんの調子を整えてかかる必要があるのでひと通り弾ひけるようになるまでが容易でなく独ひとり稽げ古いこには最も不向きであるいわんや音譜おんぷのない時代においてをや師匠についても琴は三月三味線は三年と普通ふつうに云われる。佐助は琴のような高価な楽器を買う金も

なし第一あんな嵩張るものを担ぎ込む訳に行かないので三味線から始めたのであるが調子を合わせることは最初から出来たというそれは音を聴き分ける生れつきの感覚が少くともコンマ以上であったことを示すと共に、平素春琴に随ずい行して検校の家で待つてゐる間にいかに注意深く他人の稽古を聴いていたかを証するに足る。調子の区別も曲の詞も音の高低も節ふしまわ廻しも総すべて彼は耳の記憶きおくを頼りにしなければならなかつたそれ以外に頼るものは何もなかつた。かくして十五歳の夏から約半歳の間は幸い同室の先輩の外に誰にも知られずに済んだのであつたがその年の冬に至つて一つの事件が起つたある夜明け方と云つても冬の午前四時頃まだ真つ暗な夜中も同然の時刻に、鴟屋ごりようじんの御寮人すなわち春琴の

母のしげ女がふと厠に起きてどこからともなく洩れて来る「雪」の曲を聞いたのである。昔は寒稽古と云つて寒中夜のしらしら明けに風に吹き曝さらされながら稽古をするという習慣があつたけれども道修町は薬屋の多い区域くいきであつて堅儀かたぎな店舗てんぼが軒のきを列つらね遊芸の師匠や芸人などの住宅のある所でもなしなまめかしい種類の家は

一 軒いっけんもないのであるそれにしんしんと更ふけた真夜中、寒稽古にしても時刻があまり突飛過ぎる、寒稽古なら一生懸命撥音たかく弾くであろうに微かすかな爪弾きで弾いているそのくせ一つ所がてんを合点の行くまで繰り返して練習しているらしく熱心のさまが想おもいやられた。鴟屋の御察人は訝いぶかしみながらもその時は大して気にも止めず寝てしまったがその後二三度も夜中起き出いでるごとに耳につい

たことがありそう云えば私も聞きましたどこで弾いているのでござりましょう、狸たぬきの腹はら鼓つづみとも違うようでござりますなどと云う者も出て来て店員たちの知らぬ間に奥で問題になっていた。佐助は夏以来ずっと押入の中でしていればよかつたのだが誰も気が付きそうにないので大胆だいたんになつて来たのと、何分激しい業務のよかよか余暇すいみんに睡すい眠時間を盗ぬすんでは稽古するのであるから次第に寝不足が溜たまつて来て暖い所だとい居い睡ねむりが襲おそつて来るので、秋の末頃から夜な夜なそつと物干台ものほしだいに出て弾いた。いつも夜の四つ時すなわち午後十時には店員たちと共に眠りにつき午前三時頃に眼を覚まして三味線を抱かかえて物干台ものほしだいに出るそうして冷たい夜気に触ふれつつ独習を続け東ほが仄ほかに白そみ初そめる刻限に至つて再び寢床に帰

るのである春琴の母が聞いたのはそれであつた。けだし佐助が忍しのび出た物干台というのは店舗てんぼの屋上にあつたのであろうから真下に寝ている店員共よりも中前裁なかせんざいを隔へだてた奥の者が渡り廊下ろうかの雨戸を開けた時にまずその音を聞きつけたのである。奥からの注意で店員共が取り調べられ結局佐助の所為と分つて一番番頭の前に呼びつけられ大眼玉を喰くらつた上に以後は断まかじて罷りならぬと三味線を没ぼつしゅう収しゆうされたことは当然の成行を見た訳であるが、この時意外な所から佐助に救いの手が伸ばされたとかくどのくらい弾けるものか聴いてみたいという意見が奥から持ち出されたのである。佐助はこの事が春琴に知れたら定めし機嫌を損ずるであらうただ与えられた手曳きの役をし

ていればよいのに丁稚の分ぶんざい際で生意気な真似まねをすると憫殺びんさつされるか 嘲ちやうしやう笑しょうされるか、どつちみち碌ろくなことはあるまいと恐れを抱いだいていただけに「聴いてやろう」と云われるとかえつて尻込しりごみをした。自分の誠意が天に通じてこいさんの心を動かしたのなら有難いけれども多分いちじよう一場の笑い草にしてやろうという慰みなぐさ半分のいたずらであるとしか思えなかつたしそれに人前で聴かせるほどの自信もなかつた。しかし聴こうと云い出したからはいかに辞退しても許すはずのない春琴である上に母親や姉妹たちも好こ奇心うきしんに駆かられているのでついに奥の間へ呼び出され独習の結果を披露ひろうすることになったのである彼に取ってはまことに晴れの場面であった。当時佐助は五つ六つの曲をどうやらこなすまでに仕

上げていたので知っているだけを皆やってみよと云われるままに
 度胸を据すえて精限り根限り弾いた「黒くろ髪かみ」のようなやさしいも
 のや「茶音頭」のような難曲や素もとより何の順序もなく聞き囃かじりで
 習ったのであるからいろいろのものもを不規則に覚えていたのであ
 る鴟屋の家族は佐助が邪じや推すいしたように笑い草にする積りであつ
 たかも知れないが、短時日の独稽古にしてはかんどころも確かな
 ら節廻しも出来ていることが分つて聴いた後には皆感心した

○

春琴伝に曰く「時に春琴は佐助が志を憐み、なんじ汝の熱心に賞めでて以

後は妾わらわが教えて取らせん、汝よ余暇あらかあらば常に妾を師と頼みて稽古を励むべしと云い、春琴の父安左衛門もついにこれを許しければ佐助は天にも昇のぼる心地して丁稚の業務に服する傍かたわら日々一定の時間を限り指南を仰ぐこととはなりぬ。かくて十一歳の少女と十五歳の少年とは主従の上に今また師弟ちぎりの契を結びたるぞ目出度めでたき」と。

気むずかしやの春琴が佐助に対して突とつぜん然かかゝる温情を示したのはなぜであつたらうか実は春琴の発意ではなく周囲の者がそう仕向けたのであるともいう。思うに盲目の少女は幸福な家庭にあつてもややもすれば孤独こどくに陥り易く憂鬱ゆううつになりがちであるから親たちはもちろん下々しもじもの女中共まで彼女の取扱とりあつかいに困り、何とかして心を慰め気を晴らさせる術もあらばと苦慮くりよしていた矢先

たまたま佐助が彼女と趣味を同じゅうすることを知ったのである。大方こいさんの我が儘わままに手を焼いていた奥の奉公人たちは佐助にお相手役をなすり付けて少しでも自分たちの荷を軽くしようという考から、何と佐助どんは奇特なものではござりませぬかあれをせつかくこいさんが仕込んでおやりなされましたらどうぞござります定めし本人も冥みょう加がに余り喜ぶことでもござりませうなどと水を向けたのではなかつたであらうか。ただし下手へたにおだてるとツムジを曲げる春琴であるから必ずしも周囲の仕向けに乗せられたのではないかも知れぬさすがに彼女もこの時に至つて佐助を憎にくみからず思うようになり心の奥底に春水の湧わき出づるものがあつたのかも知れぬ。何にしても彼女が佐助を弟子に持とうと云い出し

てくれたのは親兄弟や奉公人共に取つて有難いことだったいくら
天才児だと云つても十一歳の女師匠が果して人を教えることが出
来るかどうかは問う所でない、ただそういう風にして彼女の退たいく
屈つが紛まぎれてくれれば端はたの者が助かる云わば「学校ごっこ」のよ
うな遊ゆうぎ戲をあてがい佐助にお相手を命じたのである。だから佐助
のためよりも春琴のために計らつたことなのであるが結果から見
れば佐助の方が遥はるかに多く恩おん沢たくに浴した。伝には「丁稚の業務
に服かたする傍わら日々一定の時間を限り」とあるけれども今まででも毎
日手曳きを勤め一日の中の何時間かはこいさんに仕えていたので
あるその上こいさんの部屋へ呼ばれて音楽の授業を受けたとする
と店の仕事を顧かえりみる暇はなかつたであろう。安左衛門は商人に仕

立てる積りで預かった子を娘の守りにしてしまつては国元の親たちに濟まぬという心づかいもあつたらしいが丁稚一人の将来よりも春琴の機嫌を取る方が大切であつたし佐助自身もそれを望んでいる以上、また当分はそうして置いてもと黙許もつきよの形になつたのであろうと思われる。佐助が春琴を「お師匠様」と呼び出したのはこの時からであつて常には「こいさん」と呼んでよいが授業の間は必ずそう呼ぶように春琴が命じたそして彼女も「佐助どん」と云わずに「佐助」と云い、すべて春松検校がその内弟子を遇する様を真似げんじゆう 厳重とに師弟の礼を執らせたかくして大人たちの企おとな図したごとくたわいのない「学校ごっこ」が続けられ春琴もそれに紛れて孤独こどくを忘れていたのであるが、二人はその後月を重ね年

を経て一向この遊戯を中止する模様がなかつたかえつて二三年後には教える方も教えられる方も次第に遊戯の域いきを脱して真劍しんけんになつた。春琴の日課は午後二時頃に鞆うつぼの検校の家へ出かけて三十分ないし一時間稽古を授かり帰宅後日の暮れまで習つて来たものを練習する。さて夕食を済ませてから時々気が向いた折に佐助を二階の居間へ招いて教授するそれがついには毎日欠かさず教えるようになりどうかすると九時十時に至つてもなお許さず、「佐助、わてそんなこと教おせたか」「あかん、あかん、弾けるまで夜通しかかつたかて遣やりや」と激しく叱咤しつたする声がしばしば階下の奉公人共を驚おどろかした時によるとこの幼い女師匠は「阿呆あほう、何で覚えられへんねん」と罵ののしりながら撥ばちをもつて頭なぐを殴り弟子がしく

しく泣き出すことも珍めづらしくなかつた

○

昔は遊芸を仕込むにも火の出るような凄すさまじい稽古をつけ往々おうおう弟子に体刑たいけいを加えることがあつたのは人のよく知る通りである本年〔昭和八年〕二月十二日の大阪朝日新聞日曜のページに「人形浄瑠璃じょうろうりの血まみれ修業」と題して小倉敬二君が書いている記事を見るに、摂津大掾亡き後の名人三代目越路太夫こしじだゆうの眉間みけんには大きな傷痕きずあとが三日月型に残っていたそれは師匠豊沢団七から「いつになつたら覚えるのか」と撥で突き倒された記念であると

いうまた文楽座の人形使い吉田玉次郎の後頭部にも同じような傷痕がある玉次郎若かりし頃「阿波の鳴門」で彼の師匠の大名人吉田玉造が捕り物の場の十郎兵衛を使い玉次郎がその人形の足を使った、その時キツト極まるべき十郎兵衛の足がいかにしても師匠玉造の氣に入るように使えない「阿呆め」というなり立廻りに使っていた本身の刀でいきなり後頭部をガンとやられたその刀痕が今も消えずにいるのである。しかも玉次郎を殴った玉造もかつて師匠金四のために十郎兵衛の人形をもつて頭を叩き割られ人形が血で真赤に染まった。彼はその血だらけになって砕け飛んだ人形の足を師匠に請うて貰い受け真綿にくるみ白木の箱に収めて、時々取り出しては慈母の霊前に額ずくがごとく礼拝した「この人

形の折檻せつかんがなかつたら自分は一生凡ほん々ほんたる芸人の末で終つた
 かも知れない」としばしば泣いて人に語つた。先代大隅おおすみ太夫だゆうは
 修業時代には一見牛のように鈍どん重じゆうで「のろま」と呼ばれてい
 たが彼の師匠は有名な豊沢団平俗に「大団平」と云われる近代の
 三味線の巨匠きよしようであつたある時蒸し暑い真夏の夜にこの大隅が
 師匠の家で木下このした蔭かげ挟はさ合あ戦せんの「壬生村みぶ」を稽古きこしてもらつて
 いると「守り袋まもぶくろは遺品いひんぞ」というくだりがどうしても巧うまく語れ
 ない遣り直し遣り直して何なん遍べん繰り返してもよいと云つてくれな
 い師匠団平は蚊帳かやを吊つて中に這入つて聴きいている大隅は蚊かに血
 を吸われつつ百遍、二百遍、三百遍と際限もなく繰り返している
 うちに早や夏の夜の明け易やすくあたりが白み初めて来て師匠もいつ

かくたびれたのであろう寝入ってしまったようであるそれでも

「よし」と云つてくれないうちはと「のろま」の特色を發揮して

どこまでも一生懸命根氣よく遣り直し遣り直して語っていると

やがて「出来た」と蚊帳の中から団平の声、寝入ったように見え

た師匠はまんじりともせず聴いてくれたのであるおよそか

くのごとき逸話は枚挙に遑なくあえて浄瑠璃の太夫や人形使いに

限ったことではない生田流の琴や三味線の伝授においても同様で

あつたそれにこの方の師匠は大概盲人の検校であつたから不具

者の常として片意地な人が多く勢い苛酷に走つた傾きがないでも

あるまい。春琴の師匠春松検校の教授法もつとに厳格をもつて聞

えていたことは前述のごとくややもすれば怒罵が飛び手が伸びた

教える方も盲人なら教わる方も盲人の場合が多かったので師匠に叱しかられたり打たれたりする度に少しづつ後ずさりをし、ついに三味線を抱かかえたまま中二階の段梯子だんぼしごを転げ落ちるような騒さわぎも起った。後日春琴が琴曲指南の看板かかを掲げ弟子を取るようになってから稽古けいこ振りの峻しゅん烈れつをもつて鳴らしたのもやはり先師の方法を踏とう襲しゆうしたのであり由来する所がある訳なのだが、それは佐助を教えた時代から既に萌すできぎしていたのであるすなわち幼い女師匠の遊戯ゆうぎから始まり次第に本物に進化したのである。あるいは云う男の師匠が弟子を折檻する例は多々あるけれども女だてらに男の弟子を打ったり殴なぐつたりしたという春琴のごときは他に類が少いこれをもつて思うに幾分嗜虐しぎやく性せいの傾向があつたのではないか稽

古に事寄せて一種変態な性せいよく慾的快味を享きょうらく樂していたのではないかと。果してしかるや否いなや今日において断定を下すことは困難であるただ明白な一事は、子供がままごと遊びをする時は必ず大人おとなの真似をするされば彼女も自分は検校に愛せられていたのでかつて己おのれの肉体に痛つうぼう棒きつを喫したことはないが日頃の師匠しせうの流り儀ぎを知り師たる者はあるのようにするのが本来であると幼心がに合あ点てんして、遊戯ゆうぎの際さいに早くも検校の真似をするに至ったのは自然しぜんの数かずでありそれが昂こうじて習しゆい性せいとなつたのであろう

佐助は泣き虫であつたものかこいさんに打たれる度にいつも泣いたというそれがまことに意気地なくひいひいと声を挙げるので

「またこいさんの折檻せつかんが始まつた」と端はたの者は眉まゆをひそめた。

最初こいさんに遊戯をあてがつた積りの大人たちもここに至つてすこぶる当惑とうわくした毎夜おそくまで琴や三味線の音が聞えるのさ

えやかましいのに間々まま春琴の激はげしい語調で叱り飛ばす声加わり

その上に佐助の泣く声が夜の更ふけるまで耳についたりするのであ

るあれでは佐助どんも可哀かわいそうだし第一こいさんのためにならぬ

と女中の誰だれ彼かれが見るに見かねて稽古の現場へ割つて這はい入りとう

さんまあ何という事でんの姫御前ひめごぜのあられもない男の児こにえらい

ことしやはりまんねんなあと止めだてでもすると春琴はかえつて

肅しゆくぜん然えりと襟えりを正してあんた等知つたこツちやない放ほツといと
 威いたけだか丈高おになつて云つたわてほんまに教おせてやつてるねんで、遊
 びごツちやないねん佐助のためを思やこそ一生懸命になつてるね
 んどれくらい怒おこつたかていじめたかて稽古は稽古やないかいな、
 あんた等知らんのか。これを春琴伝は記して汝等なんじらわ妾あなどを少女と侮
 りあえて芸道の神聖を冒おかさんとするや、たとい幼少なりとていや
 しくも人に教うる以上師たる者には師の道あり、妾が佐助に技を
 授くるはもとより一時の兎戯じぎにあらず、佐助は生来音曲を好めど
 も丁稚でっちの身として立派なる検校にも就つく能あたわず独習するが不憫ふびんさ
 に、未熟みじゆくながらも妾が代りて師匠となりいかにもして彼が望み
 を達せしめんと欲なりする也、汝等が知る所に非あらず疾とくこの場を去る

べしと毅然きげんとして云い放ちければ、聞く者その威容いように怖れ弁舌おそに
 驚きおどろほうほうの体ていにて引き退さがるを常じょうとしたりきと云つているもつて
 春琴の勢い込んだ劍幕けんまくを想像することが出来よう。佐助も泣き
 はしたけれども彼女のそういう言葉ことばを聞いては無限の感謝さへを捧げ
 たのであつた彼の泣くのは辛つらさを咏こらえるのみにあらず主とも師匠
 とも頼む少女の激励げきれいに対する有難ありがた涙なみだも籠こもつていた故ゆえにどん
 な痛い目に遭あつても逃にげはしなかつた泣きながら最後まで忍耐にんたい
 し「よし」と云われるまで練習した。春琴は日によつて機嫌きげんのよ
 い時と悪い時とがあり口やかましく叱言こいごとを云うのはまだよい方で
 黙まゆつて眉ひそを顰ひそめたまま三の絃いとをぴんと強く鳴らしたりまたは佐助
 一人に三味線を弾かせ可否を云わずにじつと聴いていたりするそ

んな時こそ佐助は最も泣かされた。ある晩のこと茶音頭のていご手事を稽古していると佐助の呑み込みのこ込みが悪くてなかなか覚えいくどない幾度やっても間違えるのに業を煮にやして例のごとく自分は三味線を下に置き、やあチリチリガン、チリチリガン、チリガンチリガンチリガーチテン、トツントツンルン、やアルルトンと右手で激しく膝ひざを叩たたきながら口三味線で教えていたがついには黙然もくねんとして突つつ放ばなしてしまった。佐助は取り着く嶋しまもなくさればと云つて止やめる訳わけにも行かず何とか彼かとか独りで考かえては弾はいているといつまで立つてもよいと云つてくれないそうになると逆上してますますトチり出す体中に冷汗ひやあせが湧わく何が何やら出鱈目でたらめを弾くばかりであるしかも春琴は寂然じやくねんとして一層唇くちびるを固く閉じ眉根まゆねに深く刻んだ

皺しわをピクリともさせないかくのごときこと二時間以上に及んだ頃
 母親のしげ女が寢間着姿で上つて来て、熱心にも程がある度が過
 ぎては体に毒だからと宥なだめるようにして二人を引き分けた。明く
 る日春琴は両親の前へ呼び出されてそなたが佐助に教えてやる親
 切は結構だけれども弟子を罵ののつたり打つたりするのは人も許し我
 も許す検校さんのすること也なりそなたはいかに上手と云つても自分
 がまだお師匠さんに習っているのに今からそんな真似をしては必
 ず慢心の基もとになろうおよそ芸事は慢心したら上達はしませぬ、あ
 まつさえ女の身として男を捉とらえ阿呆あほうなどと口くちぎ汚たなく云うのは聞き
 きづら
 辛きづらしあれだけはなにとぞ慎つつしんで下されもうこれからは時間を定
 めて夜が更ふけぬうちに止やめたがよい佐助のひいひい泣く声が耳に

ついで皆が寝られないで困りますと、ついで叱言をいったことのない父と母とが懇ろに説諭したのでさすがの春琴も返す言葉がなく道理に服した体であつたがそれも表面だけのことで実際は余り利き目がなかつた。佐助は何という意気地なしぞ男の癖に些細なことに慄え性もなく声を立てて泣く故にさも仰山らしく聞えお蔭で私が叱られた、芸道に精進せんとならば痛さ骨身にこたえるとも齒を喰いしばつて堪え忍ぶがよいそれが出来ないなら私も師匠を断りますとかえつて佐助に嫌味を云つた爾来佐助はどんなに辛くとも決して声を立てなかつた

鴟もずや屋の夫婦は娘春琴が失明以来だんだん意地悪になるのに加えて稽古が始まってから粗そぼう暴な振ふるまい舞さえするようになったのを少からず案じていたらしいまことに娘が佐助という相手を得たことは善よし悪あしであつた佐助が彼女の機嫌を取ってくれるのは有ありがた難いけれども何事もご無理ごもつともで通す所から次第に娘を増長させる結果になり将来どんなに根性のひねくれた女が出来るかも知れぬと密ひそかに胸を痛めたのであろう。それかあらぬか佐助は十八歳の冬から改めて主人の計らいに依つて春松検校の門に這はい入つたすなわち春琴が直接教授することを封ふうじてしまったのである。これは親達かんがえの考では娘が師匠まねの真似をするのが最も悪い何よりも娘

の品性に良からぬ影響を与えると見たからであつたらうが同時に佐助の運命もこの時に決した訳であるこの時以来佐助は完全に丁稚の任務を解かれ名実共に春琴の手曳てびきとしてまた相弟子あいでしとして検校の家へ通うようになった。本人がそれを望んだのは云うまでもないとして安左衛門も大いに国元の親達を説き付けりようかい 諒解りようかいを得るように努めた商人になる目的を放棄ほうきさせる代りには行末ゆくすえのことを保証し必ず捨て置かぬからとそこは言葉を尽したものと察せられる。按あんずるに安左衛門夫婦は春琴のために慮おもんばかつて佐助を婿むこに貰もらつたらと云う意志が動いていたのであるろう不具の娘であつてみれば対等の結婚はむずかしい佐助ならば願つてもない良りようえ縁縁であると思うのも無理からぬ所である。しこうしてその翌々

年すなわち春琴十六歳佐助二十歳の時始めて親達は結婚のことを
 諷ふうしたのであつたが意外にも彼女はにべもなく峻しゆんきよ拒きよした自分
 は一生夫を持つ気はない殊ことに佐助などとは思ひも寄らぬと甚しい
 不機嫌であつたしかるに何ぞ凶はからんそれより一年を経て春琴の体
 にただならぬ様子が見えることを母親が感づいたのであるまさか
 とは思つたけれども内々気を付けてみるとどうも怪あやしい、人眼ひとめに
 立つようになつてからでは奉公人の口がうるさい今のうちならと
 かく繕つくろう道もあるうと父親にも知らせずそつと当人たずに尋ねると
 そんな覚えはさらさらないと云う深くも追及しかねるので腑ふに落
 ちないながら一箇いつかげつ月ほど捨てておくうちにもはや事実を蔽おほい隠かく
 せぬまでになつた。今度は春琴は素直に妊にんしん娠を認めたがいかに

聞かれても相手を云わない強いて問とい詰つめるとお互たがいに名を云わぬ
 約やくそく束をしたと云う佐助かと云えば何であのような丁稚風情にと
 頭から否定した。誰しも一往佐助に疑いを持つて行くところであ
 るけれども親たちにしても去年の春琴の言葉があるのでよもやと
 思つたのであるそれにそう云う関係があればなかなか人前を隠し
 切れぬもの、経験の浅い少女と少年がどんなに平氣を装よそおつても嗅か
 ぎ付かれずにはいないものだが佐助が同門の後輩こうはいとなつてから
 は以前のように夜更けるまで対坐たいざする機会もなく時折兄弟子の格
 式をもつておさらいをしてやるぐらいなものその他の時はどこま
 でも氣位の高いこいさんであつて、佐助を遇ぐうするに手曳き以上の
 扱あつかいはしていないようなので奉公人共も二人の間に間違いがある

うとは思つても見なかつたむしろ主従の区別が有り過ぎ情味が乏しいほどに思えた。しかし佐助に聞いたならば様子が知れよう相手はきつと検校の門下生であろうと見当をつけたが佐助も知らぬ存ぜぬの一点張りで、自分の身に覚えのないのはもちろん誰といつて心あたりもないと云う。けれどもこの時御寮人の前へ呼ばれた佐助の態度がオドオドして胡散臭いのうさんくさに不審が加わり問と詰つめて行くと辻褄つじつまの合わないことが出て来て実はそれを申しましてはこいさんに叱しかられますからと泣き出してしまった。いやいやこいさんを庇かばうのはよいが主人の云い付けをなぜ聴かぬ隠し立てをしてはかえつてこいさんのためになりませぬ是非相手ぜひの名を云つてごらんと口を酸すツぱくしても云わぬそれでも結局のところ相

手はやはり当の本人の佐助であることが言外げんがいに酌み取れた決して白状しませぬとこいさんに約束した手前おそを恐れて明瞭めいりようには云わないのだがそれを察してもらいたそうに云うのであった。鴟屋夫婦は出来てしまったことは仕方がないしまあまあ佐助だったのはよかったそのくらいなら去年縁組えんぐみをすすめた時なぜあのよな心にもないことを云ったのやら娘気むすめぎというものはたわいのないものと愁うれいのうちにも安堵あんどの胸をさすり、この上は人の口は端にかからぬうち早く一緒にさせる方がと改めて春琴に持ちかけてみると、またしてもそんな話はいやでござります去年も申しましたように佐助などは考えてもみませぬこと、私の身を不憫ふびんがって下さいますのは忝かたじけうござりますがいかに不自由な体なればと

て奉公人を婿むこに持とうとまでは思いませぬお腹なかの子の父親に対しても済まぬことでござりますと顔色を変えて云うのであるではそのお腹の子の父親はと聞けばそれは尋ねたずないで下さりませどうでその人に添そう積りはござりませぬという。そうなるもまた佐助の言葉がアヤフヤに思えどちらの云うことが本当やらさつぱり訳が分らなくなり困こころじ果てたが佐助以外に相手があるうとも考えられず今となつてはきまりが悪いのでわざと反対なことを云うのであろうそのうちには本音を吐はくであろうともうそれ以上の詮せ議んぎは止めて取敢とりあえず身二みふたつになるまで有馬へ湯治とうじにやることにした。それは春琴が十七歳の五月で佐助は大阪に居残り女中二人が付き添つて十月まで有馬に滞たいざい在ざいし目出度めでたく男の子を生んだその赤あか

ん坊ぼうの顔が佐助に瓜うり二つであつたとやらでようやく謎なぞが解けたよ
うなもの、それでも春琴は縁組の相談に耳を借さないのみなら
ずいまだに佐助が赤児あかごの父親であることを否定する拠よん所どころなく二
人を対決させてみると春琴は屹きつとなり佐助どん何なんぞ疑うたがわられるよ
うなこと云うたんと違ちがうかわてが迷めい惑わくするよつて身に覚えくぎのな
いことはないとはつきり明りを立ててほしいと云う釘くぎを打たれて
佐助はひと縮みに縮み上り仮りにも御主のとうさんを滅めつ相そうなこ
とでござります、子飼こがいの時より一ひと方かたならぬ大恩を受けながら
そのような身の程知らずの不ふ料りょう簡けんは起おこしませぬ思いも寄よらぬ濡ぬ
れ衣ぎぬでござりますと今度は春琴に口を合わせ徹頭てつとう徹尾てつび否認する
のでいよいよ埒らちが明かなくなつた。それでも生れた子が可愛かわいくは

ないかそなたがそんなに強情を張るなら父ててなし児ごを育てる訳には
 行かぬ断たつて縁組みが厭いやだとあれば可哀かわいそうでも嬰兒ややくはどこぞへ
 くれてやるより仕方がないがと子を枷かせにして詰つめ寄るとなにとぞ
 どこへなとお遣やりなされて下さりませ一生独り身で暮くらす私に足
 手まといでござりますと涼すずしい顔つきで云うのである



この時春琴が生んだ子はよそへ貰もらわれて行つたのである弘化こうか二年
 の生れに当るから今日存命しているとも思われなし貰もらわれて行
 った先も知れていないいずれ両親がしかるべく処置したのである

う。そんな訳でとうとう春琴は我を張り通し妊娠の一件を有耶無耶に葬つてまたいつの間にか平気な顔で佐助に手曳きさせながら稽古に通つていたもうその時分彼女と佐助との関係はほとんど公然の秘密になつていたらしいそれを正式にさせようとすれば当人たちがあくまで否認するものだから、娘の氣象を知っている親達はやむをえず黙許の形にしておいたと見えるかくして主従とも相弟子とも恋仲ともつかぬ曖昧な状態が二三年つづいた後春琴二十歳の時春松検校が死去したのを機会に独立して師匠の看板を掲げることになり親の家を出て淀屋橋筋に一戸を構えた同時に佐助も附いて行ったのである。けだし彼女は検校の生前すでに実力を認められいつにても独立して差支ないよう許可を得てい

たことと思われる検校は己おのれの名の一字を取って彼女に春琴とい
う名を与え晴れの演奏の時しばしば彼女と合奏したり高い所を唄うた
わせたりして常に引き立ててやっていたされば検校亡なき後に門戸もんこ
を構えるに至ったのは当然であるかも知れぬ。しかし彼女の年ねんれ
齡い境きようぐう遇ぐう等に照らしにわかいに独立する必要があつたらうとは
考えられないこれは恐らく佐助との関係おもんばかを慮つたのであろうとい
うのは、もはや公然の秘密になつて二人をいつまで曖あいまい昧まいな
状態に置いては奉公人共どもの示しが付かずせめて一軒けんの家に同棲どうせい
させるといふ方法を取つたので春琴自身もその程度ならあえて不
服はなかつたのであろう。もちろん佐助は淀屋橋へ行つてからも
少しも前と異つた扱あつかいはされなかつたやはりどこまでも手曳きで

あつたその上検校が死んだので再び春琴に師事することになり今
 は誰に遠慮えんりよもなく「お師匠様」と呼び「佐助」と呼ばれた。春
 琴は佐助と夫婦らしく見られるのを厭いとうこと甚はなはだしく主従の礼儀師
 弟の差別を厳格にして言葉づかいの端々はしはしに至るまでやかましく
 云い方を規定したまたまそれに悖もとることがあれば平身低頭して詫
 まつても容易に赦ゆるさず執拗しつようにその無礼を責めた。故ゆえに様子を知
 らない新参の入門者は二人の間を疑よしう由もなかったというまた鴟
 屋の奉公人共はあれでこいさんはどんな顔をして佐助どんを口説くど
 くのだろうこつそり立ち聴ききしてやりたいと蔭かげぐち口を云つたとい
 うなぜ春琴は佐助を待つことかくのごとくであつたか。ただし大
 阪は今日でも婚こんれい礼に家柄いえがらや資産や格式などを云々うんぬんすること

東京以上であり元来町人の見識の高い土地であるから封建ほうけんの世
 の風習は思いやられる従つて旧家の令嬢れいじょうとしての矜恃きようじを捨
 てぬ春琴のような娘が代々の家来筋に当る佐助を低く見下みくだしたこ
 とは想像以上であつたであらう。また盲目びやうめいの僻みひがもあつて人に弱
 味を見せまい馬鹿ばかにされまいとの負けじ魂たましいも燃えていたであらう。
 とすれば佐助を我が夫として迎むかえるなど全く己れを侮辱ぶじよくするこ
 とだと考えたかも知れぬよろしくこの辺の事情を察すべきである
 つまり目下めしたの人間と肉体の縁を結んだことを恥はずる心があり反動
 的によそよそしくしたのであらう。しからは春琴の佐助を見るこ
 とと生理的必要品以上に出でなかつたであらうか多分意識的にはそ
 うであつたかと思われる



伝に曰くいわ「春琴居常潔けつべき癖いきにしていささかにも垢着あかきたる物を
 纏まとわず、肌はだぎ着類は毎日取換とりかえて洗せん濯たくを命じたりき。また朝夕に
 部屋の掃除そうじを励れい行こうせしむること厳密を極め、坐ざするごとに一々
 指頭をもつて座布ざふ団だん畳たみ等の表面を撫なで試ごみ毫釐ごうりの塵じん埃あいをも厭いと
 たりき。かつて門弟の胃を病む者あり、口中に臭しゅう氣きあるを悟さと
 ず師の前に出でて稽古しけるに、春琴例のごとく三の絃いとを鏗こう然ぜん
 と弾はじきてそのまま三味線を置き、顰ひん蹙しゆくして一語を発せず、門
 弟な為す所を知らずして恐る恐る理由を問うこと再三に及びし時、

妾は盲人なれども鼻は確たしかなり、
々そうそうに去つて含嗽がんそうをせよと云
いしとぞ」と。盲人なるが故にかくのごとく潔癖けつぺきだったのでもあ
ろうがまたこういう人が盲人であつたとすると身の周りの世話を
する者の心づかいは推量に余る。手曳きという役は手を曳くばか
りが受け持ちではない飲食起臥ききが入浴上じょうし 厠等日常生活の些事さじに亘わた
つて面倒を見なければならぬしこうして佐助は春琴の幼時よりこ
れらの任務を担当し性癖せいへきを呑み込んでいたので彼でなければ到
底気に入るようには行かなかつた佐助はむしろこの意味において
春琴に取り欠くべからざる存在であつた。それに道修町の時分あるじに
はまだ両親や兄弟達へ気がねがあつたけれども一戸の主となつて
からは潔癖と我が儘わままが募つる一方で佐助の用事はますます煩多はんたを加

えたのであるこれは鴨しぎさわ沢てる女の話でさすがに伝には記してないが、お師匠様は廁から出ていらしても手をお洗いになつたことがなかつたなぜなら用をお足しになるのにご自分の手は一いっぺん遍もお使いにならない何から何まで佐助どんがして上げた入浴の時もそうであつた高貴の婦人は平気で体じゆうを人に洗わせて羞しゆう恥ちといふことを知らぬといふがお師匠様も佐助どんに対しては高貴の婦人と選ぶ所はなかつたそれは盲目のせいもあるうが幼い時からそういう習慣に馴なれていたので今更何の感情も起らなかつたのかも知れない。彼女はまた非常にお洒落しゃれであつた失明以来鏡を覗のぞいたことはなくとも己れの容色については並々ならぬ自信があり衣類や髪かみ飾かざりの配合等に苦勞することは眼明きと同じであ

った思うに記憶力きおくりよくの強い彼女は九歳の時の己れの顔立ちを長く
 覚えていたであろうしその上世間の評判や人々のお世辞が始終耳
 に這入るので自分の器量のすぐれていることはよく承知していた
 のであるされば化粧けしように浮身うきみを窺やっすことは大抵たいていでなかつた。常
 鶯うぐいすを飼かつていて糞ふんを糠ぬかに交まぜて使かいたまた糸瓜へちまの水を珍ちんちよう重し
 顔や手足がすべつるつる滑すべるようになければ氣持を悪あがり地肌の荒あれ
 るのを最も忌いんだ総すべて絃樂器を弾ひく者は絃を押おさえる必要上左手
 の指つめの爪はの生はえ加減を氣にするものだが必ず三日目ごとに爪を剪き
 らせ鑷やすりをかけさせたそれが左の手ばかりでなく両手両足に及んだ
 剪ると云つてもほとんど眼に見えて伸のびていないわずかに一厘りん二
 厘に過ぎないのをいつも同じ恰かっこう好に正確に剪るように命じ剪つ

た痕あとを一つ一つ手でさぐつて見て少しでも狂くるいがあることを許さなかつた佐助は実にこのような世話を一人で引き請うけ合間にはまた稽古をしてもらい時にはお師匠様に代つて後進の弟子達に教えもした



肉体の關係ということにもいろいろある佐助のごときは春琴の肉体の巨細こさいを知り悉つくして剩あます所なきに至り月並の夫婦關係や恋愛關係の夢想むそだもしない密接な縁を結んだのである後年彼が己おのれもまた盲目になりながらなおよく春琴の身边に奉仕して大過なきを得

たのは偶然でない。佐助は一生妻妾を娶らず丁稚時代より八十三歳の老後まで春琴以外に一人の異性をも知らずに終り他の婦人に比べてどうのこうのと云う資格はないけれども晩年鰥暮らしをするようになってから常に春琴の皮膚が世にも滑かたで四肢が柔軟であつたことを左右の人に誇つて已まらずそればかりが唯一の老いの繰り言であつたしばしば掌を伸べてお師匠様の足はちようどこの手の上へ載るほどであつたと云い、また我が頬を撫でながら踵の肉でさえ己のここよりはすべすべして柔かたであつたと云つた。彼女が小柄だつたことは前に書いたが体は着痩せのする方だ裸体の時は肉づきが思いの外豊かに色が抜けるほど白く幾つになつても肌はだに若々しいつやがあつた平素魚鳥の料理を好み分けても

鯛たいの造りが好物で当時の婦人としては驚おどろくべき美食家であり酒も少々は嗜たしなんで晩酌ばんしやくに一合は欠かさなかつたと云うからそんなことが関係していたかも知れない「盲人が物を食う時はさもしそ
うに見え気の毒な感じを催もよおすものであるまして妙齡みょうれいの美女の
盲人においてをや春琴はそれを知つてか知らずか佐助以外の者に
飲食の態を見られるのを嫌きらつた客に招かれた時などはほんの形式
に箸はしを取るのみであつたから至つてお上品のように思われたけれ
ども内実は食べ物に贅ぜいを尽つくしたもつとも大食というのではない飯
は軽く二杯たべおかずも一ひと箸はしずついろいろの皿へ手をつけるの
で品数が多くなり給仕に手数のかかることは大抵でなかつたまる
で佐助を困らせるのが目的のように思えるほどだつた。佐助は鯛

のあらゆるの身をむしること蟹かにえび蝦等の殻からを剥ぐことが上手じょうずになり鮎あゆなどは姿を崩くずさずに尾の所から骨を綺麗きれいに抜き取った頭とうは髪もまた非常に多量で真綿のごとく柔くふわふわしていた手は華車きやしゃで掌がよく撓しない絃を扱うせいか指先に力があり平手で頬を撲うたれると相当に痛かった。すこぶる上気のほせ性の癖くせにまたすこぶる冷え性で盛夏せいかといえどもかつて肌に汗あせを知らず足は氷のようにつめたく四季を通じて厚い袴ふきわた綿はいの這入はいった羽二重はぶたえもしくは縮ちりめ緬んの小袖こそでを寝間着すそに用い裾を長く曳いたまま着て両足を十分に包んで寝いねそれで少しも寝姿が乱れなかつた。上気することを恐れるためなるべく炬燵こたつや湯たんぽを用いず余り冷えると佐助が両足ふところを懐ふとこに抱ぬくいて温めたがそれでも容易に温もらず佐助の胸がかえ

って冷え切つてしまうのであつた入浴の時は湯殿ゆどのに湯氣ゆげが籠こもらぬ
 ように冬でも窓を開あけ放ち微温湯ぬるまゆに一二分間ずつ何回にも漬つかる
 ようにした長湯をすると直じきに動悸どうきがして湯氣に上りそうになる
 ので出来るだけ短時間にあたた暖まり大急ぎで体を洗わねばならぬかく
 のごときことを知れば知るほど佐助の勞苦真まことに察すべしである。
 しかも物質的に報いられる所は甚はなはだ薄うすく給料等も時々の手当てに
 過ぎず煙草たばこ錢せんにも窮きゆうすることがあり衣類は盆暮ぼんくれに仕着せを貰
 うだけであつた師匠の代稽古はするけれども特別の地位は認めら
 れず門弟や女中共は彼を「佐助どん」と呼ぶように命ぜられ出稽
 古の供をする時は玄関先で待たされた。ある時佐助齧むしば齒を病み右
 の頬おびたが夥たしく脹はれ上り夜に入つてから苦痛堪たえ難きほどであつた

のを強しいて怵こらえて色に表わさず折々そつと合嗽うがいをして息がかからぬように注意しながら仕えているとやがて春琴は寢床に這入つて肩を揉もめ腰こしをさすれと云う云われるままにしばらく按摩あんましているともうよいから足を温ぬくめよと云う畏かしこまつて裾の方に横臥おうがし懷を開いて彼女の蹠あしのうらを我が胸板の上に載のせたが胸が氷のごとく冷えるのに反し顔は寢床ねどこのいきれのためにかつかつと火照ほてつて齒痛がいよいよ激はげしくなるのに溜たまりかね、胸の代りに脹れた頬を蹠あてへあてて辛かろうじて凌しのいでいるとたちまち春琴がいやと云うほどその頬を蹴けつたので佐助は覚えずあつと云つて飛び上つた。すると春琴が曰いわくもう温めてくれぬでもよい胸で温めよとは云うたが顔で温めよとは云わなんだ蹠あしに眼のなきことは眼明きも盲人も変りはないに

何とて人を欺あざむかんとはするぞ汝なんじが齒を病んでゐるらしきは大方昼
 間の様子にても知れたりかつ右の頬と左の頬と熱も違えば脹れ加
 減も違ふことは蹠あしにてもよく分るなりさほど若しくば正直に云う
 たらよろしからん妾めかけとても召めしつかい使いを勞いたわる道を知らざるにあら
 ずしかるにいかにも忠義らしく装いながら主人の体をもつて齒を
 冷やすとは大それた横おうちやくもの着者ぬきものかなその心底こころ憎にくさも憎しと。春琴
 の佐助を遇ぐうすることおおよそこの類であつた分けても彼が年若い
 女弟子に親切にしたり稽古してやつたりするのを憚よろこばずたまたま
 そういう疑いがあると嫉妬しつとを露骨ろこつに表わさないだけ一層意地の悪
 い当り方をしたそんな場合に佐助は最も苦しめられた



女で盲目で独身であれば贅ぜいたく沢と云つても限度があり美衣美食を
ほしいままにしてもたかが知れているしかし春琴の家には主あるじ一人
に奉公人が五六人も使われている月々の生活費も生なまやさしい額で
はなかつたなぜそんなに金や人手がかつたと云うとその第一の
原因は小鳥道楽にあつたなかんずく彼女は鶯うぐいすを愛した。今日啼なき
ごえの優れた鶯は一羽一万円もするのがある往時といえども事情
は同じだつたであろう。もつとも今日と昔とでは啼きごえの聴き
分け方や翫がん賞しょう法が幾分異なるらしいけれどもまず今日の例を
もつて話せばケツキヨ、ケツキヨ、ケツキヨケツキヨと啼なくいわ

ゆる谷渡りの声ホーキーベカコンと啼くいわゆる高音、ホーキ

ケキヨウの地声の外にこの二種類の啼き方をするのが値打ちなの

であるこれは藪鶯では啼かないたまたま啼いてもホーキーベ

カコンと啼かずにホーキーベチャと啼くから汚い、ベカコンと、

コンと云う金属性の美しい余韻を曳くようにするにはある人為的

な手段をもつて養成するそれは藪鶯の雛を、まだ尾の生えぬ時に

生け捕つて来て別な師匠の鶯に付けて稽古させるのである尾が生

えてからだと親の藪鶯の汚い声を覚えてしまうのでもはや矯

正することが出来ない。師匠の鶯も元来そう云う風にして人為

的に仕込まれた鶯であり有名なのは「鳳凰」とか「千代の友」

とか云った様にそれぞれ銘を持っていてるさればどこの誰氏の家に

はしかじかの名鳥がいると云うことになれば鶯を飼かっている者は
 我が鶯のために遥々はるばるとその名鳥の許もとを訪ね啼なき方を教えてもら
 うこの稽古を声を付けに行くと云い大抵たいてい早朝に出かけて幾日も
 続ける。時には師匠の鶯の方から一定の場所に出張し弟子の鶯共
 がその周囲に集まりあたかも唱歌の教室のごとき観を呈するもち
 ろん箇々ここの鶯によつて素質の優劣ゆうれつ声の美醜びしゆうがあり、同じ谷渡
 りや高音にも節廻ふしまわしの上手下手余韻じょうずへたよいんの長短等さまざまであるか
 ら良き鶯を獲とることは容易にあらず獲れば授業料の儲もつけがあるの
 で価の高いのは当然である。春琴は我が家に飼かっている一番優秀
 な鶯に「天鼓てんこ」と云う銘をつけて朝夕その声を聴くのを楽しんだ
 天鼓の啼く音は実に見事であつた高音のコンという音の冴さえて余

韻のあることは人工の極致きよくちを尽つくした楽器のようで鳥の声とは思
 われなかつたそれに声の寸が長く張りもあればつやもあつたされ
 ば天鼓の取り扱いは甚だはなは鄭重ていちようで食物のごときも注意に注意を
 加えさせた普通鶯の擦すり餌えを作るには大豆だいずと玄米げんまいを炒いつて粉に
 した物へ糠ぬかを交まじえて白粉しろこを製し、別に鮎ふなや鮓はえの干ほしたのを粉にし
 た鮎粉ふなこと云うものを用意してこの二つを半々に混じ大根の葉を擦す
 った汁しるで溶とくなかなか面倒なものであるその外声ほかをよくするため
 にはえびづる という蔓草つるくさの茎くきの中に巢食すくう 昆こんちゆう 虫ちゆうを捕とつて来て
 日に一匹びきあるいは二匹宛ずつ与えるかくのごとき手数を要する鳥を大
 概いがい五六羽は飼育しいくしていたので奉公人の一人か二人はいつもそれ
 に係りきりであつた。また鶯は人の見ている前では啼かない籠かごを

飼桶こわけという桐きりの箱に入れ障子しょうじを箒はめて密閉し紙の外からほんのり明りがさすようにするこの飼桶の障子には紫檀したん黒檀などをを用いて精巧せいこうな彫刻ちようこくを施ほどこしたりあるいは蝶貝ちようがいを鏤ちりばめ蒔絵まきえを描いたりして趣向しゆこうを凝らし中には骨董品こつとうひんなどもあつて今日でも百円二百円五百円などと云う高価なのが珍めづらしくない天鼓の飼桶には支那から舶載はくさいしたという逸品いっぴんが箒はまつていた骨は紫檀で作られ腰こしに琅玕ろうかんの翡翠ひすいの板が入れてありそれへ細々こまごまと山水楼閣ろうかうかくの彫りほがしてあつた誠まことに高雅なものであつた。春琴は常に我が居間とこわきの床脇とこわきの窓の所にこの箱を据すえて聴きき入り天鼓の美しい声が嘖さえずる時は機嫌きげんがよかつた故に奉公人共は精々水をかけてやり啼かせるようにした大抵快晴の日の方がよく啼くので天氣の悪い

日は従つて春琴も氣むずかしくなつた天鼓の啼くのは冬の末より
 春にかけてが最も頻ひんぼん繁うつつで夏に至ると追ひ追ひ回数が少くなり春
 琴も次第に鬱うつつ々とする日が多かつた。いつたい鶯は上手に飼え
 ば寿命が長いものだけれどもそれには細心の注意が肝かん要ようで経験
 のない者に任せたら直じき死んでしまう死ねばまた代りの鶯をかう
 春琴の家でも初代の天鼓は八歳の時に死しその後しばらく二代目
 を継つぐ名鳥を得られなかつたが、数年を経てようやく先代を恥はずか
 しめぬ鶯を養成しこれを再び天鼓と名づけて愛あい翫がんした「二代目
 の天鼓もまたその声れい靈い妙みょうにして迦陵頻迦かりようびんがを欺あざむきければ日夕
 籠ざゆうを座右ざゆうに置きて鍾しょう愛あいすること大方ならず、常に門弟等らをし
 てこの鳥の啼く音に耳かたむを傾むけしめ、しかる後に諭さとして曰いわく、汝等

天鼓の唄うたうを聴け、元來は名もなき鳥の雛なれども幼少より練磨れんま
 の功空むなしからずしてその声の美なること全く野生の鶯と異れり、
 人あるいは云わん、かくのごときは人工の美にして天てん然ねんの美に
 あらず、谷深き山路に春を訪ね花を探りて歩く時流れを隔へだつる霞かすみ
 の奥おくに思いも寄らず啼き出でたる藪鶯の声の風雅ふうがなるに如しかずと、
 しかれども妾は左様には思わず、藪鶯は時と所を得て始めて雅致がち
 あるように聞ゆるなり、その声を論ずれば未いまだ美なりと云う可べか
 らず、これに反して天鼓のごとき名鳥の轉るを聞けば、居ながら
 にして幽邃ゆうすい閑かん寂じやくなる山さん峽きやうの風趣ふうしゆを偲しのび、溪けい流りゆうの響ひびき
 の潺せん湲かんたるも尾の上の桜さくらの鬢あいたい鬢たいたるもことごとく心眼心耳に
 浮うび来り、花かも霞かすみもその声の裡うちに備わりて身は紅塵こうじん万ばん丈じやうの都

門にあるを忘るべし、これ技工をもつて天然の風景とその徳を争うものなりおんぎよく音曲ひけつの秘訣もここに在りと。また鈍根どんこんの子弟を恥はじしめて、小禽しょうきんといえども芸道の秘事を解するにあらずや汝人間に生れながら鳥類にも劣れりと叱咤しつたすることしばしばなりき」なるほど理窟りくつはその通りであるが何かにつけて鶯に比較ひかくされては佐助を始め門弟一同やりきれなかつたことであらう

○

鶯に次いで愛したものは雲雀ひばりであつたこの鳥は天に向つて飛揚ひようせんとする習性があり籠うちの裡にあつても常に高く舞まい上るので籠の

形も縦たてに細長く造り三尺四尺五尺と云うような丈たけに達する。しかれども雲雀の声を真に賞美するには籠より放つてその姿の見えなくなるまで空中に舞い上らせ、雲の奥深く分け入りながら啼く声を地上にあつて聞くのであるすなわち雲切りの技を楽しむ。大抵雲雀は一定時間空中に留まった後再び元の籠へ舞まい戻もどつて来る空中に留まつている時間は十分ないし二三分であり長く留まつているほど優秀な雲雀であるとされる故に雲雀の競技会の時には籠を一行に並べて置き同時に戸を開いて空へ放ちやり最後に戻つて来たものを勝かちとする。劣れつ等の雲雀は戻つて来る時誤あやまつて隣となりの籠へ這入つたり甚しきは一丁も二丁も離れた所へ下りたりするが普通つうはちゃんと自分の籠かごを弁わきままえているけだし雲雀は垂すい直ちよくに舞い

上り空中の一箇所に留まつていて再び垂直に降下するのであるさ
 れば自然と元の籠へ戻るようになる雲切りとは云うけれども雲を
 切つて横に飛ぶのではない雲を切るように見えるのは雲の方が雲
 雀を掠めて飛ぶためである。淀屋橋筋の春琴の家の隣近所に家居
 する者はうらかな春の日に盲目の女師匠が物干台に立ち出でて
 雲雀を空に揚げて見かけることが珍しくなかつた彼女の
 傍にはいつも佐助が侍り外に鳥籠の世話をする女中が一人附いて
 いた女師匠が命ずると女中が籠の戸を開ける雲雀は嬉々としてツ
 ンツン啼きながら高く高く昇つて行き姿を霞の中に没する女師匠
 は見えぬ眼を上げて鳥影を追いつつやがて雲の間から啼きしき
 る声が落ちて来るのを一心に聴き惚れている時には同好の人々が

めいめい自慢じまんの雲雀を持ち寄つて競技に興じていることもある。そういう折に隣近所の人々も自分たちの家の物干に上つて雲雀の声を聴かせてもらう中には雲雀よりも別べっぴん嬪びんの女師匠の顔を見たがる手合もある町内の若い衆などは年中見馴みなれているはずなのに物好きな痴漢ちかんはいつの世にも絶えないもので雲雀の声が聞えるとそれ女師匠が拝めるぞとばかり急いで屋根へ上つて行つた彼等らがそんな騒いだのは盲目というところに特別の魅力みりよくと深みを感じ、好奇心をそそられたのであろう平素佐助に手を曳かれて出稽古おもむに赴く時は黙々としてむずかしい表情をしているのに、雲雀を揚げる時は晴れやかに微笑ほほえんだり物を云つたりする様子なので美貌ぼうぼうが生き生きと見えたのもあろうか。まだこの外ほかにも駒こまどり鳥お鸚お

鷓^{うむ}目白^{ほおしろ}頬 白などを飼つたことがあり時によつていろいろな鳥を
 五羽も六羽も養つていたそれらの費用は大抵でなかつたのである

○

彼女はいわゆる内^{うちづら}面の悪い方であつた外に出ると思ひの外^{ほか}愛想
 がよく客に招かれた時などは言語動作が至つてしとやかで色気が
 あり家庭で佐助をいじめたり弟子を打つたり罵^{ののし}つたりする婦人^{ふじん}と
 は受け取りかねる風情があつたまた附き合ひのためには見え^{かざ}を飾
 り派手を喜び祝儀無^{ぶしゅうぎ}祝儀盆暮^{ぼんく}れの贈^{ぞうとう}答等には鴉^か屋の娘たる格
 式をもつてなかなかの気前を見せ、下男下女おちやこ駕籠^{かご}昇^かき人

力車夫等への纏頭てんととうにも思い切った額を弾はずんだ。だがそれならば無鉄砲むてつぽうな浪費家ろうひかであつたかと云うのに、断じてそうではなかつたらしいかつて作者は「私の見た大阪及び大阪人」と題する篇中に大阪人のつましい生活振ぶりを論じ東京人の贅ぜいたく沢たくには裏も表もないけれども大阪人はいかに派手好きのように見えても必ず人の氣の付かぬ所で冗費じようひを節し締括しめくくりを附けていることを説いたが春琴も道修町どしやうちの町家の生れであるどうしてその辺にぬかりがあらうや極端しやしに奢侈しやしを好む一面極端りんしよくに吝嗇よくぼで慾張よくぼりであつた。もともと派手を競うのは持ち前の負けじ魂たまに発はつているのでその目的そに添そわぬ限りは妄みだりに浪費することなくいわゆる死に金きんを使つかわなかつた氣紛きまぐれにぱつぱつと播まき散らすのでなく使途しとを考え効

果を狙^{ねら}つたのであるその点は理性的打算的であつたさればある場合には負けじ魂がかえつて貪^{どんよく}慾に變形し門弟より徴^{ちよう}する月謝やお膝^{ひざつき}付のごとき、女の身としておおよそ他の師匠連との振り合^あいもあるべきに自ら恃^じすることすこぶる高く一流の検校と同等の額を要求して譲^{ゆず}らなかつた。そのくらいはまだよいとして弟子共が持つて来る中元や歳暮^{せいぼ}の付け届け等にまで干^{かん}渉^{しよう}し少しでも多いことを希望して暗々^{あんあんり}裡にその意を諷^{ふう}すること執^{しつ}拗^{よう}を極めたある時盲人の弟子があり家貧しき故に月々の謝礼も滞^{とど}りがちであつたが中元に付け届けをすることが出来ず心ばかりに白仙羹^{はくせんこう}をひと折買つて来て情を佐助に訴え、なにとぞ私の貧^{あわれ}を憐^{あわれ}みお師匠様にそこをよろしくお執成^{とりな}し下されお目こぼしを願^{ねが}度^{いたし}と云つ

た。佐助も氣の毒に思い恐る恐るその旨むねを取り次いで陳ちんべん弁する
 とにわかには顔の色を変えて月謝や付け届けをやかましく云うのを
 慾張りのように思うか知れぬがそんな訳ではない錢金はどうでも
 よけれど大体の目安を定めて置かなんたら師弟の礼儀というもの
 が成り立たぬ、あの子は毎月の謝礼をさえ怠りおこた今また白仙羹ひと
 折を中元と称して持参するとは無礼の至り師匠ないがしを蔑ろにすると云
 われても仕方がなからう、せつかくながらそれほど貧しくては芸
 道の上達も覺束おぼつかないもちろん事と品によつては無報酬むほうしゆうにて教
 えてやらぬものでもないがそれは行く末に望みもあり万人に才を
 惜おしまれるような麒麟兒きりんじに限ったこと、貧苦こんに打ち克かちひと廉かどの
 名人となる程の者は生れつきから違っているはず根こんと熱心とばか

りでは行かぬあの子は厚かましいだけが取柄とりえで芸の方はさして見込みがあろうとも思えず貧を憐んで下されなどは己惚うぬぼれも甚しい、なまじ人に迷惑めいわくをかけ恥はじを曝さらすよりもうこの道で立つことをふつつりあきらめたがよかろう、それでも習いたいのなら大阪には幾いくらもよい師匠があるどこへなと勝手に弟子入りをしや私の所は今日限り止やめてもらいますこちらから断りますと、云い出したからはいかに詫わび入っても聴き入れずとうとう本当にその弟子を断ってしまった。また余分の付け届けを持って行くとさしも稽古の嚴重な彼女もその日一日はその子に対して顔色やわらを和やげ心にもない褒ほめ言葉を吐はいたりするので聞く方が気味を悪がりお師匠さんのお世辞と云うと恐ろしいものになっていた。そんな次第ゆえ故諸

方からの到来物は一々自ら吟味ぎんみして菓子かしの折まで開けて調べると
いう風で月々の収入支出等も佐助を呼びつけて珠算盤そろばんを置かせ決
算を明かにした彼女は非常に計数さとに敏く暗算が達者であり一度聞
いた数字は容易に忘れず米屋の払いはらがいくらいくら酒屋の払いが
いくらいくらと二月三月前ふたつきみつのことまで正確に覚えていた畢ひつきよ
竟う彼女の贅沢は甚だしく利己的なもので自分が奢おごりに耽ふけるだけ
どこかで差引をつけなければならぬ結局お鉢はちは奉公人に廻まわった。
彼女の家庭では彼女一人が大名のような生活をし佐助以下の召使
は極度の節約を強いられるため爪に火を燈ともすようにして暮らした
その日その日の飯めしの減り方まで多いの少いのと云うので食事も十
分には摂とれなかつたくらいであつた奉公人は蔭かげぐち口くちをきいて、お

師匠様は鶯や雲雀の方がお前等らより忠義者だと仰おつしやるが忠義
 なのも無理がない、私等よりも鳥の方がずっと大事にされている
 と云った

○

鴟もずや屋の家でも父の安左衛門が生存中は月々春琴の云うがままに仕
 送ったけれども父親が死んで兄が家督かどくを継いでからはそうそう云
 うなりにもならなかった。今日でこそ有閑ゆうかん婦人の贅ぜい沢はさまで
 珍めづしくないようなものの昔は男子でもそうは行かぬ裕ゆう福ふくな家で
 も堅儀かたぎな旧家ほど衣食住の奢おごりを慎つつしみ儻せん上しょうの誹そしりを受けないよ

うにし成り上り者に伍ごするのを嫌きらった春琴に奢侈しゃしを許したのは外ほかに楽しみのない不具の身を憐れんだ親の情であつたのだが、兄の代になるとかくの批難ひなんが出て最大限度月に幾いくばく何と額をきめられそれ以上の請求には応じてくれないようになった彼女の吝嗇もそういう事が多分に關係しているらしい。しかしなおかつ生活を支えて余りある金額であつたから琴曲の教授などはどうでもよかつたに違いなく弟子に対して鼻息の荒かつたのも当然である。事實春琴の門を叩たたく者は幾人と数えるほどで寂々じやくじやくりようりよう寥々ひまたるものであつたさればこそ小鳥道楽などに耽ふけつている暇があつたのであるただし春琴が生田流の琴においても三絃においても当時大阪第一流の名手であつたことは決して彼女の自負のみにあら

ず公平な者は皆認め^{みな}ていた春琴の傲慢^{ごうまん}を憎む者といえども心中私^{ひそ}かにその技を妬^{そね}みあるいは恐れていたのである作者の知つている老芸人に青年の頃^{ころ}彼女の三絃をしばしば聴いたという者があるもつともこの人は浄るりの三味線弾きで流儀は自ら違^{ちが}うけれども近年地唄の三味線で春琴のごとき微妙^{びみょう}の音を弄^{ろう}するものを他に聴いたことがないと云うまた団平が若い頃にかつて春琴の演奏を聞き、あわれこの人男子と生れて太棹^{ふとざお}を弾きたらんには天晴^{あつぱ}れの名人たらんものをと嘆^{たん}じたという団平の意太棹は三絃芸術の極致にしてしかも男子にあらざればついに奥義^{おうぎ}を究むる能^{あた}わずたまま春琴の天稟^{てんぴん}をもつて女子に生れたのを惜^おしんだのであろうか、そもそもまた春琴の三絃が男性的であつたのに感じたのであ

ろうか。前掲ぜんけいの老芸人の話では春琴の三味線を蔭で聞いている
 と音締ねじめが冴さえていて男が弾いているように思えた音色も単に美し
 いのみではなくて変化に富み時には沈痛ちんつうな深みのある音を出し
 たといういかさま女子には珍しい妙手であつたらしい。もし春琴
 が今少し如才じよさいなく人に謙へりくだることを知っていたなら大いにその名
 が顕あらわれたであろうに富貴ふうぎに育つて生計の苦難を解せず氣随氣儘きずいきまま
 に振舞ふるまつたために世間から敬遠うちよされ、その才の故にかえつて四方
 に敵むなを作り空しく埋れ果てたのは自業自得ではあるけれどもまこ
 とに不幸と云わねばならぬ。されば春琴の門に入る者はかねてよ
 り彼女の實力に服しこの人を措おいて師と頼む者はないと云う風に
 思い詰め、修業のためには甘んじて苛辣からつな鞭撻べんたつを受けよう怒罵どば

も打擲ちようちやくも辞する所にあらずという覚悟かくごの上で来たのであつた
 がそれでも長く堪たえ忍しのんだ者は少く大抵は辛抱しんぼう出来ずにしまつ
 た素人しろうとなどはひと月と続かなかつた。按あんずるに春琴の稽古振り
 が鞭撻いの域いきを通り越こして往々意地の悪い折檻せつかんに発展し嗜虐しぎやく的
しきやく色彩しきさいをまで帯びるに至つたのは幾分か名人意識も手伝つていた
 のであらうすなわちそれを世間も許し門弟も覚悟していたのでそ
 うすればするほど名人になつたような気がし、だんだん凶に乗つ
 てついに自分を制しきれなくなつたのである

鳴しぎさわ沢さわてる女はいう、お弟子さんはほんに少うござりましたが中にはお師匠さんのご器量が目あてで習いに来られるお人もござりました、素人衆は大概そんなのが多かつたようでござりますと。美貌で未婚でかつ資産家の娘であつたからこれはいかにもありそうに思われる彼女が弟子を遇ぐうすること峻しゅん烈れつであつたのはそういう冷やかし半分おおかみの狼連おおかみを撃げ退たいする手段でもあつたと云うが皮肉にもそれがかえつて人気を呼んだらしくもある邪じや推すいをすれば真面目まじめな玄くろうと人の門弟の中にも盲目しもとの美女しもとの筈しもとに不思議な快感を味わいつつ芸の修業よりもその方に惹ひき付けられていた者が絶無ではなかつたであろう幾人かはジャン・ジャック・ルーソーがいたであろう今や春琴の身に降りかかつた第二の災難じよを叙じよするに際

し伝にも明めいりよう瞭きさいな記載を避けてあるためにその原因や加害者を
 判然と指摘し得ないのが残念であるが、恐らく上記のごとき事情
 で門弟の何者かに深刻な恨みうらを買ひその復讐ふくしゅうを受けたと見る
 のが最も当っているようである。ここに考えられることは土佐堀
 の雑穀ざつこく商美濃屋九兵衛の倅せがれに利太郎と云うぼんちがあつたなか
 なかの放蕩ほうとう者でかねてより遊芸ゆうげい自慢であつたがいつの頃より
 か春琴の門に入つて琴三味線を習つていたこの者親の身代しんだいを鼻
 にかけてどこへ行つても若旦那わかだんなで通るのをよい事にして威張いばる癖くせ
 があり同門の子弟を店の番頭手代並みに心得こころえ見下す風があつた
 ので春琴も心中面白くなかつたけれども、そこは例の附け届けを
 十分にたつぷり薬を利きかしてあるので断りもならず精々じよさい如才じよさいな

く扱あつかつていた。しかるにさすがのお師匠おれさんも己おれには一いち目もく置くいて
 いるなどと云い触ふらし殊ことに佐助けいべつを軽けい蔑べつして彼の代稽古だいきこを嫌きらい
 お師匠おれさんの教授けうでなければ治ちまらずだんだん増長ぞうちやうする様子ようすに春
 琴つのも癩かん癖ぺきを募つらせていたところ父親ちち九兵衛くべゑが老後らうごの用意よういに天下てんが
ぢやや茶屋ぢやの閑かん静せいな場所ばしよを選び葛家葺くずやぶきの隠居いんきよじよ所しよを建て十数株じゆしゆの梅うめ
 の古木こきを庭園ていゑんに取り込んであつたがある年の如きざら月げつにここで梅見うめみ
 の宴うたげを催もよおし、春琴はるびんを招まねいたことがあつた。総大将そうだいしやうは若旦那わかしやの利太りた
 郎らうそれに幫間ぼうかん芸者等げいしやの末社まつしやが加まわり春琴はるびんには佐助けいべつが附つき添そつ
 て行いつたこと云いうまでもない佐助けいべつはその日利太郎にちりたろう始め末社まつしやからち
 よいちよい杯さかずきをささされるので大おほいに当あ惑わくした近頃ちかごろ師匠ししやうの晚酌ばんしやくの
 相手あひまをして少すこしばかり手てが上あつたけれども余あまり行いける口くちでなかつ

たしよそへ行つては師匠の許可がない限り一滴てきといえども飲むこ
 とを禁ぜられていたし酔よつては肝腎かんじんの手曳きの役が忽こつしよ諸しよにな
 るから飲む真似をして胡麻化ごまかしているのを利太郎が眼敏めざとく見つけ、
 お師匠はん、お師匠はんのお許しが出な佐助どん飲みやはれしま
 へん今日は梅見だつしやないかいな一日位ゆつくりさしたげなは
 れ佐助どんがへたばつたかて手曳きになりたがつてる者がそこら
 に二人や三人いまんねと胴間声どうまごえで絡からんで来るので苦笑いしなが
 らまあまあ少しはようござります余り酔わさんようにしてやって
 下されと程よくあしらうとさあお許しが出たとばかりにあちらか
 らもこちらからもさすそれでもきつと引き締めて七分通りは盃はいせ
 洗せんに飲のました。その日一座に連なつた幫間ほうかんも芸者もかねて聞

き及んだ高名の女師匠を眼のあたりに見噂うわさに違わぬ 姥うばぎくら 桜あの艶あ
さすがたと氣韻きいんとに驚おどろかぬ者なく口々に褒ほめそやしたというそれは

姿すがたと氣韻きいんとに驚おどろかぬ者なく口々に褒ほめそやしたというそれは
 利太郎の胸中を察し歎心を買わんがためのお世辞でもあつたであ
 ろうが当時三十七歳の春琴は實際よりもたしかに十は若く見え色
 あくまで白くして襟えりもと元などは見ている者がぞくぞくと寒気がす
 るように覺えた甲こうの色のつやつやとした小さな手をつつましく膝
 に置いて俯うつむ向き加減かへんにしている盲目かおのかおのあでやかさは一座ひとみの瞳ひとみ
 をことごとく惹ひき寄よせて恍こうこう惚こつたらしめたのであつた。滑こつ稽けいな
 ことは皆みなが庭園へ出て 逍しょう遥ようした時佐助は春琴を梅花の間に導
 いてそろりそろり歩かせながら「ほれ、ここにも梅がござります」
 と一々老木の前に立ち止まり手を把とつて幹みきを撫なでさせたおよそ盲

人は触覚しよっかくをもつて物の存在を確かめなければ得心しないものであるから、花木の眺めながを賞するにもそんな風にする習慣がついていたのであるが、春琴の織手せんしゆが佶屈きつくつした老梅の幹をしきりに撫なで廻す様子を見るや「ああ梅の樹きうちやまが羨あやましい」と一幫間きせいが奇声を発したすると今一人の幫間が春琴の前に立ち塞ふさがり「わたい梅の樹だつせ」と道化どうけた恰好かつこうをして疎影そえい横斜おうしやの態ていを為なしたので一同がどつと笑い崩くずれた。これらは一種の愛嬌であつて春琴を讃たたえる意味にこそなれ侮あなどる心ではなかつたけれども遊里わるじやれの悪洒落あくしゃれに馴なれない春琴は余りよい氣持がしなかつたいつも眼明きと同等に待たい遇ぐうされることを欲し差別されるのを嫌つたのでこう云う冗談じゆんたんは何よりも癩かんに触つた。やがて夜に入り座敷ざしきを変えて再び宴えんを

開いた時佐助どんあんたも疲れはったやろお師匠はんはわいが預
 かる、あつちに支度したくしたあるさかい一杯やつて来とくなはれと云
 われるままに、無闇むやみに酒を強いられぬうち腹を拵こしらえて置くに如しか
 ずと佐助は別室へ引き退つて先に夕飯の馳走ちそうを受けたが御飯ごはんを戴いた
 きますというのを銚子ちようしを持った老妓ろうぎの一人がべつたり着き切り
 でまあお一つまあお一つと重ねさせるお蔭で思いの外時間ほかを潰つぶし
 たが食事を済ませてもしばらく呼びに来ないのでそこに控えてい
 た間に座敷ざしきの方でどういふ事があつたのか、佐助を呼んで下され
 と云うのを無理さえぎに遮り手ちようず水ならばわいが附いて行つたげると廊ろ
 下うかへ連れて出て手を握にぎつたか何かであろう、いえいえやはり佐助
 を呼んで下されと強情に手を振り払ふつてそのまま立ちすくんでい

る所へ佐助が駈^かけ付け、顔色でそれと察した。しかし結局こんな事から出入りをしなくなつてくれたらいい塩^{あんばい}梅だと思つていたのに色男を台無しにされては素直にあきらめきれなかつたものかまた明くる日からずうずうしくも平気で稽古にやつて来たのでそれならば本気で叩^{たた}き込^こんでやる真劍の修業に堪^たえるなら堪えてみよとにわかにな態度を改めてピシピシと教えた。そうなると利太郎は面^{めんくら}喰^{くら}つて毎日三斗^との汗を流しふうふう云い出した元來が自分免許の芸でおだてられているうちにはよいが意地悪く突^つつ込ま^これたらアラだらけであるそこへ無^ぶ遠^{えん}慮^りな怒^ど罵^ばが飛ぶから稽古に事寄せて隙^{すき}もあらばと云うようならけた心では辛^{しん}抱^{ぼう}しきれず次第に横着になりいくらか熱心に教えてもわざと気のない弾き方をする

ついに春琴は「阿呆あほう」と云いさま撥ばちをもつて打ぶつた弾みに眉間みけんの皮を破つたので利太郎は「あ痛」と悲鳴を挙げたが、額からぼたぼた滴こぼれる血を押し拭ぬぐい「覚えてなはれ」と捨台辞すてぜりふを残して憤ふ然んぜんと座を立ちそれきり姿を見せなかつた



一説に春琴に危害を加えた者は北の新地辺に住む某少女ぼうの父親ではなかつたかというこの少女は芸者したじの下地したじツ子であつたからみっちり仕込んでもらう積りで稽古つらの辛さを泳こらえつつ春琴の門に通つていたところある日撥で頭を打たれ泣いて家へ逃にげ帰つたその傷き

痕ずあとが生えは際に残ざわつたので当人よりも親父おやじがカンカンに腹を立てて捻ねじ込こんだ多分養父ではない実父だったのであろう何ほ修行だからと云つて年齒も行かぬ女の子さいなを苛さいなむにも程がある、売り物の顔きずに疵きずをつけられこのままでは済まされないのでしてくると大分過激かげきな言辞を使ったので持ち前の聴かぬ氣を出し妾しつけの所しは躰しがび厳きびしいので通つてきいるそのくらいなら何で稽古よこに寄越よこしなされたのかと逆捻さかねじ的の挨あい拶さつをしたすると親父も負けてははず打つのも殴なぐるのもよいが眼の見えぬお人のすることは危険だどこへどんな怪我けがをさせるかも知れぬ盲人は盲人らしく殊しゆ勝しょうにせよと、出様いによつては暴力にも訴うえかねままじき氣味合なので佐助が割つて這はい入りようようその場を預かつて帰した春琴は真まつ青さおになつて

慄え上り沈黙してしまつたが最後まで謝罪の言葉を吐かなかつたこの父親が娘の器量を損ぜられた仕返しに春琴の容貌ようぼうに悪いたず戯らを加えたという。しかし生え際はぎわと云つても額の真中か耳のうしろかどこかにちよつぴり痕あとが附いたぐらいを根に持つて一生相そ好うこうが変るほどの凄じい危害を与えたと云うのは我が子いとしさすさまに取り上のぼ気げせた親心にしても余り復讐ふくしゅうが執拗しつように過ぎる第一相手は盲人であるから美貌を醜しゅうぼう貌ぼうに変ぜしめても当人にはそれほど打撃にはならないもし春琴のみを目的とするなら他にもつと痛快な方法もあろう。察する所復讐者ふくしゅうしゃの意図は春琴を苦しめるに止とどまらず春琴以上に佐助を悲嘆ひたんせしめようとしたのではないかそれはまた結果において最も春琴を苦しめることになるので

あるかく考えれば前掲ぜんけいの少女の父親よりも利太郎を疑う方が順当のように思われるがいかに。利太郎の横恋慕よこれんぼにどの程度の熱意があつたか知るべくもないが若年の頃は誰しも年下の女より年増しま女の美に憧あこがれる恐らく極道の果てのああでもないこうでもないが昂こつうじたあげく盲目の美女に蠱惑こわくを感じたのであろう最初は一時の物好きで手を出したとしても肘鉄砲ひじでつぽうを食わされた上に男の間まで割られれば随分性しょう悪わるな意趣晴らしをしないものでもない。だが何分にも敵の多い春琴であつたからまだこの外ほかにもどんな人間がどんな理由うらで恨いだみを抱いだいていたかも知れず一概いちがいに利太郎であるとは断定し難いまた必ずしも痴情ちじょうの沙汰さたではなかつたかも知れない金銭上の問題にしても、前に挙げた貧しい盲人の弟

子のような残酷ざんこくな目に遭あつた者は一人や二人ではなかつたとい
うまた利太郎ほど厚かましくはないにしても佐助を嫉妬あやむしていた
者は何人もあつたという佐助が一種奇妙な位置にある「手曳き」
であつたことは長い間には隠かくし切れず門弟中に知れ渡つていたか
ら、春琴に思いを寄せる者は私ひそかに佐助の幸福を羨うらやみある場合に
は彼のまめまめしい奉公振りに反感を抱いだいていたのである。正式
の夫であるならあるいはせめて情夫としての待たい遇ぐうを受けている
なら文句の出どころはなかつたけれども表面はどこまでも手曳き
であり奉公人であり按摩から三さん介すけの役まで勤めて春琴の身の周
りの事は一切取りしきり忠実一方の人間らしく振舞ふるまっているのを
見ては、裏面りめんの消息を解する者には片腹痛く思えたでもあろうあ

あ云う手曳きならちつとやそつと辛いことがあつても己おれだつて勤
 める感心するには当らぬと嘲あざける者も少くなかつた。されば佐助に
 憎しみをかけ春琴の美貌が一いっちょう朝恐ろしい変化を来たしたらあ
 いつがどんな面つらをするかそれでも神妙にあの世話の焼ける奉公を
 仕し遂とげるだろうかそれが見物みものだと云う全くの敵本主義からでも決
 行しないとは限らない。要するに臆おく説せつ紛ふん々ぶんとしていずれが真
 相やら判定し難いがここに全然意外な方面に疑いをかけようとす
 る有力な一説があつて曰く、恐らく加害者は門弟ではあるまい春
 琴の商売敵である某検校か某女師匠であろうと。別に証拠はない
 けれどもあるいはこれが最も穿うがつた観察であるかも知れないけだ
 し春琴が居常傲ごうがん岸がんにして芸道にかけては自ら第一人者をもつて

任じ世間もそれを認める傾向があつたことは同業の師匠連の自尊心きざつを傷け時には脅威きよういともなつたであろう検校と云えば昔は京都より盲人の男子に下される一つの立派な「位」であつて特別の衣服と乗物を許され尋常じんじょう芸人の輩やからとは世間の待遇たいぐうも違つていたのに、そう云う人が春琴の技に及ばないと云う噂を立てられては盲人であるだけに根強い意趣を含んだでもあろうし何とかして彼女の技術と評判とを葬ほうむり去る陰險な手段をも考えたであろうよ。く芸の上の嫉妬から水銀を飲ましたと云う例を聞くが春琴の場合には声楽と器楽と両方であつたから彼女の見え坊と器量自慢とに附け込み再び公衆の面前へ出られぬように相を変えさせたと云うのである。もし加害者が某検校にあらずして某女師匠であつたとす

れば器量自慢までが面憎つらにくかつたに違いないから彼女の美貌を破は壊かいし去ることに一層の快味を覚えたであらう。かく色々と疑い得らるる原因を数えて来れば早晩春琴に必ず誰かが手を下さなければ済まない状態にあつたことを察すべく彼女は不知不識しらずしらずの裡うわさわいに禍わざの種を八方へ蒔まいていたのである。



前記天下茶屋の梅見の宴の後約一箇月半を経た三月晦つごもり日の夜八つ半時頃すなわち午前三時々分に「佐助は春琴の苦吟くぎんする声に驚き眼覚めて次の間より馳はせ付つけ、急ぎ燈火を点じて見れば、何者

か雨戸を抉こじ開け春琴が伏戸ふしどに忍しのび入りしに、早くも佐助が起き
 出でたるけはいを察し、一物いちもつをも得ずして逃げ失せぬと覺しく、
 すでに四辺に人影ひとかげもなかりき。この時賊ぞくは周章しゅうしょうの余り、有
 り合わせたる鉄瓶てつびんを春琴の頭上に投げ付けて去りしかば、雪を
 欺あざむく豊頬ほうきょうに熱湯の余沫よまつ飛び散りて口惜くちおしくも一点火傷やけどの痕あとを
 留とどめぬ。素もとより白璧はくへきの微瑕びかに過ぎずして昔ながらの花顔玉容はなごころたまごころは
 依然として変らざりしかども、それより以後春琴は我が面上の些さ
 細さいなる傷を恥はずること甚しく、常に縮緬ちりめんの頭巾ずきんをもつて顔を覆おほ
 い、終日一室しつに籠居ろうきよしてかつて人前に出でざりしかば、親しき
 親族門弟おきせつといえどもその相貌うかがを窺うかがい知り難く、為ために種々なる風
 聞臆おくせつ説せつを生むに至りぬ」と云うのが春琴伝の記載である。伝は

続けて曰く「けだし負傷は輕微けいびにして天稟てんぴんの美貌をほとんど損
 ずることなかりき。その人に面接するを厭いといたるは彼女が潔癖けつぺき
 の致すところにして、取るにも足らぬ傷痕を恥辱ちじよくのごとく考え
 しは盲人の思い過しとや云わん」と。更さらにまた曰く「しかるにい
 かなる因縁いんねんにや、それより数十日を経て佐助もまた白内障わづらを煩
 い、たちまち両眼暗黒となりぬ。佐助は我が眼前まうらう朦朧もうらうとして物
 の形の次第しだいに見え分かずなり行きし時、俄にわかめくら盲目あやの怪しげなる足
 取りにて春琴の前に至り、狂喜きようきして叫さけんで曰く、師よ、佐助は
 失明いた致したり、もはや一生お師匠様のお顔の瑕きずを見ずに済むなり、
 まことによき時に盲目もうらうとなり候ものかな、これ必ず天意にて侍はべら
 んと。春琴これを聴ぶぜんきて慥然ぶぜんたることやや久し矣」と。佐助が衷ち

ゆうじよう

情を思いやれば事の真相を発くのに忍びないけれどもこの前

後の伝の叙述は故意に曲筆しているものと見る外はない彼が

偶然白内障になつたと云うのも腑に落ちないしまた春琴がいかに

潔癖でありいかに盲人の思い過しであろうとも天稟の美貌を損じ

なかつた程度の火傷であるならば何をもつて頭巾で面体を包んだ

り人に接するのを厭つたりしようぞ事實は花顔玉容に無残な変化

を来したのである。鳴沢しぎさわてる女その他二三の人の話によると賊

はあらかじめ台所に忍び込んで火を起し湯を沸かした後、その鉄

瓶を提げて伏戸に闖入し鉄瓶の口を春琴の頭の上に傾けて真

正面ともに熱湯を注ぎかけたのであると云う最初からそれが目的だつ

たので普通の物盗りでもなければ狼狽ろうばいの余りの所為しよゐでもないそ

の夜春琴は全く気を失い、翌朝に至つて正氣付いたが焼け爛れた
ひふかわ皮膚が乾き切るまでに二箇月以上を要したなかなかの重傷だつた
 のである。されば物ものすご凄こい相貌の変わり方について種々きかい奇怪なる噂
 が立ち毛もうはつ髪が剥落はくらくして左半分が禿はげ頭になつていたと云うよ
 うな風聞も根のない臆おくせつ説とのみ排はいし去る訳わけには行かない佐助は
 それ以来失明したから見ずに済んだでもあろうけれども、「親し
 き親族門弟といえどもその相貌を窺うかがい知り難がた」かつたと云うのは
 いかかであろうか絶対に何なんびと人にも見せないようにすることは不
 可能であろうし現に鳴沢てる女のごときも見ていないはずはない
 のである。ただしてゐる女も佐助の志を重んじ決して春琴の容貌の
 秘密を人に語らない私も一往いちおうは尋ねてみたが佐助さんはお師匠たず

様を始終美しい器量のお方じやと思ひ込んでいやはりましたので私もそう思うようにしておりましたと云いくわ委しくは教えてくれなかつた



佐助は春琴の死後十余年を経た後に彼が失明した時のいきさつを側近者に語ったことがありそれによつてしようさい詳細な当時の事情がようやく判明するに至つた。すなわち春琴がきようかん兇漢におそ襲われた夜佐助はいつものように春琴のねや閨の次の間にねむ眠っていたが物音を聞いて眼を覚ますと有ありあけあんどん明行燈の灯が消えていま真つくら暗な中に呻うめ

きごえがする佐助は驚いて跳とび起きまず灯をともししてその行燈あんどん
 を提ひげたまま屏風びょうぶの向うに敷しいてある春琴の寢床ねどこの方へ行つた
 そしてぼんやりした行燈の灯影ほかげが屏風の金地に反射する覺おぼつか束な
 い明りの中で部屋の様子を見廻したけれども何も取り散らした形け
いせき跡はなかつたただ春琴の枕まくらもと元に鉄瓶が捨ててあり、春琴も
じよくちゆう褥じよくちゆう中ちゆうにあつて静かに仰臥ぎようがしていたがなぜか呟うんうん々と呻うなつて
 いる佐助は最初春琴が夢ゆめに魘うなされているのだと思ひお師匠さまど
 うなされましたとお師匠さまと枕元へ寄つて揺ゆり起おこそうとした時我
 知らずあと叫んで両眼を蔽おほうた佐助々々わては浅あさましい姿にされ
 たぞわての顔を見んとおいてと春琴もまた苦しい息の下から云い
みもた身悶みもたえしつ々夢中で両手を動かし顔を隠かくそうとする様子にご安心

なされませおかお は見は致しませぬこの通り眼をつぶっております
 と行燈の灯を遠のけるとそれを聞いて気が弛ゆるんだものかそのまま
 人事不省じんじふせいになつた。その後も始終誰にもわての顔を見せてはなら
 ぬきつとこの事は内密にしてと夢ゆめうつつの裡うちに譚語うわごとを云い続け、
 何のそれほどご案じになることがござりましよう火膨ひぶくれの痕が直
 りましたらやがて元のお姿に戻られますと慰なぐさめればこれほどの大お
おやけど火傷めんていに面体の変らぬはずがあるうかそのような気休めは聞き
 ともないそれより顔を見ぬようにしてと意識が恢かいふく復するにつれ
 て一層いつそう云い募つり、医者ほかの外には佐助にさえも負傷の状態を示す
 ことを嫌がり膏藥こうやくや繃帶ほうたいを取り替かえる時は皆病室みなを追い立て
 られた。されば佐助は当夜枕元へ駈け付けた瞬しゆんかん間焼ただけ爛れた

顔をひと眼見たことは見たけれども正視するに堪えずしてとつさに面を背けたので燈明の灯の揺めく蔭に何か人間離れのした怪しい幻影を見たかのような印象が残っているに過ぎず、その後は常に繃帯の中から鼻の孔と口だけ出しているのを見たばかりであると云う思うに春琴が見られることを怖れたごとく佐助も見るところを怖れたのであつた彼は病床へ近づくとに努めて眼を閉じあるいは視線を外らすようにした故に春琴の相貌がいかなる程度に変化しつつあるかを實際に知らなかつたしまた知る機会を自ら避けた。しかるに養生の効あつて負傷も追ひ追ひ快方に赴いた頃一日病室に佐助がただ一人侍坐していると佐助お前はこの顔を見たであろうのと突如春琴が思い余つたように尋ねたいえいえ見て

はならぬと仰つしやつてでござりまするものを何でお言葉に違たがいま
 しようぞと答えるともう近いうちに傷が癒いえたら繃帯を除けねば
 ならぬしお医者様も来ぬようになる、そうしたら余人よじんはともかく
 お前にだけはこの顔を見られねばならぬと勝気な春琴も意地くじが挫
 けたかついぞないことに涙なみだを流し繃帯の上からしきりに両眼を押お
 し拭ぬぐえば佐助も諳あんぜん然として云うべき言葉なく共に嗚咽おえつするばか
 りであつたがようござりまする、必ずお顔を見ぬように致しますご
 安心なさりませと何事か期する所があるように云つた。それより
 数日を過ぎすで既に春琴も床を離れ起きているようになりいつ繃帯を
 取り除とけても差支さしつかえない状態にまで治癒ちゆした時分ある朝早く佐助は
 女中部屋から下女の使う鏡台と縫ぬい針はりとを密ひそかに持つて来て寢床

の上に端座たんざし鏡を見ながら我が眼の中へ針を突き刺つした針を刺し
たら眼が見えぬようになると云う智識があつた訳ではないなるべ
く苦痛の少い手軽な方法で盲目になろうと思ひ試みに針をもつて
左の黒眼を突いてみた黒眼を狙ねらつて突き入れるのはむずかしいよ
うだけれども白眼の所は堅かたくて針が這はい入らないが黒眼は柔かい二
三度突くと巧うまい工合ぐあいにずぶと二分ほど這入つたと思つたらたちま
ち眼球が一面に白濁はくたくし視力が失せて行くのが分つた出血も発熱
もなかつた痛みもほとんど感じなかつたこれは水晶体すいしよたいの組織
を破つたので外傷性の白内障を起したものと察せられる佐助は次
に同じ方法を右の眼に施し瞬しゆんじ時にして両眼を潰つぶしたもつとも直
後はまだぼんやりと物の形など見えていたのが十日ほどの間に完

全に見えなくなつたと云う。程経て春琴が起き出でた頃手さぐりしながら奥おくの間に行きお師匠様私はめしいになりました。もう一つつしようがい

生涯せいざい お顔を見ることはござりませぬと彼女の前に額ぬかずいて云つた。佐助、それはほんとうか、と春琴は一語を発し長い間黙然と沈思ちんししていた佐助はこの世に生れてから後にも先にもこの沈黙の数分間ほど楽しい時を生きたことがなかつた昔悪七兵衛景あくしちびようえかげ

清きよは頼朝よりともの器量きりやうに感じて復讐ふくしやうの念を断じもはや再びこの人の姿を見まいと誓ちかい両眼りやうがんを抉えぐり取つたと云うそれと動機は異なるけれどもその志ひその悲壮ひそなことは同じであるそれにしても春琴が彼に求めたものはかくのごときことであつたか過日彼女が涙を流して訴えたのは、私がこんな災難さいなんに遭あつた以上お前も盲目になつて

欲しいと云う意であつたかそこまでは忖^{そんたく}度し難いけれども、佐助それはほんとうかと云つた短かい一語が佐助の耳には喜びに慄^{ふる}えているように聞えた。そして無言で相對しつつある間に盲人のみが持つ第六感の働きが佐助の官能に芽生えて来てただ感謝の一^{おの}念より外^{ほか}何物もない春琴の胸の中を自^{おの}ずと会得することが出来た今まで肉体の交^{こうしやう}渉はありながら師弟の差別に隔^{へだ}てられていた心と心とが始めてひしと抱^だき合^あい一つに流れて行くのを感じた少年の頃^{おしい}押入れの中の暗黒世界で三味線の稽古をした時の記憶が蘇^よみ^みがえ生^なつて来たがそれとは全然心持が違つたおよそ大概な盲人は光の方向感だけは持つている故に盲人の視野はほの明るいもので暗黒世界ではないのである佐助は今こそ外界の眼を失つた代りに内

界の眼が開けたのを知りああこれが本当にお師匠様の住んでいら
 っしやる世界なのだこれでしょうようお師匠様と同じ世界に住むこ
 とが出来たと思つたもう衰おとろえた彼の視力では部屋の様子も春琴の
 姿もはつきり見分けられなかったが繻帯で包んだ顔の所在だけが、
 ぼうつと灰ほのじろ白く網もうまく膜に映じた彼にはそれが繻帯とは思えなか
 ったつい二た月前までのお師匠様の円満微妙な色白の顔が鈍にぶい明
 りの圈けんの中らいごうぶつに來迎らいごうぶつ仏のごとく浮うかんだ

○

佐助痛くはなかったかと春琴が云つたいいえ痛いことはござりま

せなんだお師匠様の大難に比べましたらこれしきのことが何でござりましようあの晩曲くせもの者が忍び入り辛き目をおさせ申したのを知らずに睡ねむつておりましたのは返す返すも私の不調法毎夜お次の間に寝させて戴いただくのはこう云う時の用心でござりますのにこのよ
うな大事を惹ひき起しお師匠様を苦しめて自分が無事でありまして
は何としても心が済まず罰ばちが当つてくれたらよいと存じましてな
にとぞわたくしにも災さいなん難をお授け下さりませこうしては申も
うしわけ
訳訳の道が立ちませぬと御ご霊りょう様さまに祈願きがんをかけ朝夕おが拜まんでおり
ました効があつて有難や望みが叶かない今朝けさ起ききましたらこの通り両
眼が潰つぶれておりました定めし神様も私の志を憐あわれみ願ねがいを聞き届
けて下さつたのでござりましようお師匠様お師匠様私にはお師匠

様のお変りなされたお姿は見えませぬ今も見えておりますのは三
十年来眼の底に沁しみついたあのなつかしいお顔ばかりでござりま
すなにとぞ今まで通りお心置きのうお側そばに使つて下さりませ俄にわか
盲目めくらの悲しさには立ち居も儘ままならずご用を勤めますのにもたと
たどしゆうござりましようがせめて御身の周りのお世話だけは人
手を借りとうござりませぬと、春琴の顔のありかと思われる仄ほのじ
白しろい円光の射して来る方へ盲しいた眼を向けるとよくも決心して
くれました嬉うれしゆう思うぞえ、私は誰の恨うらみを受けてこのような
目に遭おうたのか知れぬがほんとうの心を打ち明けるなら今の姿を
外ほかの人には見られてもお前にだけは見られとうないそれをようこ
そ察してくれました。あ、あり難がとうござりますそのお言葉を伺うかがい

ました嬉しきは両眼を失うたぐらいには換かえられませぬお師匠様
 や私を悲嘆に暮くれさせ不仕合わせな目に遭あわせようとした奴やつはど
 この何者か存じませぬがお師匠様のお顔を変えて私を困らしてや
 ると云うなら私はそれを見ないばかりでござります私さえ目しい
 になりましたらお師匠様のご災難は無かつたのも同然、せつかく
 の悪わる企たくみも水の泡あわになり定めし其奴そやつは案に相違していることで
 ござりましょうほんに私わたくしは不仕合わせどころかこの上もなく仕合
 わせでござります卑ひき怯ような奴うらの裏かを搔かき鼻をあかしてやったかと
 思えば胸がすくようござります佐助もう何も云やんなど盲人の
 師弟相あい擁ようして泣いた



禍わざわいを転じて福と化した二人のその後の生活の模様もようを最もよく知つ
 ている生存者は嶋しま沢ざいてる女あるのみである照女は本年七十一歳
 春琴の家に内弟子として住み込んだのは明治七年十二歳の時であ
 った。てる女は佐助に糸竹の道を習かたう傍わら二人の盲人の間を幹あつせん旋にわか
 して手曳きとも付かぬ一種の連絡係りを勤めたけだし一人は俄にわか盲
 目一人は幼少からの盲目とは云え箸はしの上げ下しにも自分の手を使
 わず贅沢ぜいに馴なれて来た婦人の事故ゆえ是非せひともそう云う役目を勤める
 第三者の介在が必要でありなるべく気の置けない少女を雇やとうこと
 にしていたがてる女が採用されてからは実じつ体ていなところが気に入

られ大いに二人の信任を得てそのまま長く奉公をし、春琴の死後は佐助に仕えて彼が検校の位を得た明治二十三年まで側に置いてもらつたと云う。てる女が明治七年に始めて春琴の家へ来た時春琴は既に四十六歳遭そうなん難の後九年の歳月を経もう相当の老婦人であつた顔は仔細しさいがあつて人には見せないまた見てはならぬと聞かされていたが、紋羽もんはぶたえ二重ひふの被布を着て厚い座布団の上に据すわり浅あさぎねずさぎねず黄鼠ちりめんの縮緬ずきんの頭巾で鼻の一部が見える程度に首を包み頭巾の端まぶたが眼瞼まぶたの上へまで垂たれ下るようにし頬ほおや口なども隠かくれるようにしてあつた。佐助は眼を突いた時が四十一歳初老に及んでの失明はどんなにか不自由だつたであらうがそれでいながら痒かゆい処へ手が届くように春琴を労いたわり少しでも不便な思いをさせまいと努め

る様は端はたの見る目もいじらしかつた春琴もまた余人の世話では氣に入らず私の身の周りの事は眼明きでは勤まらない長年の習慣ゆえ故佐助が一番よく知っていると云い衣裳の着附けも入浴も按摩あんまも上じようしよ厠うしもいまだに彼を煩わづらわした。さればてる女の役目と云うのは春琴よりもむしろ佐助の身边の用を足すことが主で直接春琴の体に触ふれたことはめつたになかつた食事の世話だけは彼女が居ないとどうにもならなかつたけれどもその外ほかはただ入用な品物を持ち運び間接に佐助の奉公を助けた例えば入浴の時などは湯殿の戸口までは二人に附いて行きそこで引き返さかつて手が鳴なつてから迎むかえに行くともう春琴は湯から上つて浴衣を着頭巾かぶを被かつていてその間の用事は佐助が一人で勤めるのであつた盲人の体を盲人が洗つてや

るのはどんな風にするものかかつて春琴が指頭をもつて老梅ろうばいの
 幹を撫なでたごとくにしたのであろうが手数かの掛かかることは論外で
 あつたらう万事がそんな調子だからとてもややこしく見ていら
 れない、よくまああれでやつて行けると思えたが当人たちはそう
 云う面倒を享きよう樂らくしているものごとく云わず語らず細やかな
 愛情が交あされていた。按あんずるに視覚を失つた相愛の男女が触しよつか
 覚くの世界を樂しむ程度は到底われ等の想像を許さぬものがある
 うさすれば佐助が猷けんしん身しん的に春琴に仕つかえ春琴がまた怡い々いとしてそ
 の奉仕を求め互たがいに倦うむことを知らなかつたのも訝あやしむに足りない。
 しかも佐助は春琴の相手をする余暇よかを割さいて多くの子女を教えて
 いた当時春琴は一室に垂たれ籠こめてのみ暮らすようになり佐助に琴

台と云う号を与えて門弟の稽古を全部引き継がせ、音曲指南おんぎよくしなんの看板にも鴟屋春琴の名の傍へ小さく温井琴台ぬくいの名を掲げていたが佐助の忠義と温順とはつとに近隣きんりんの同情を集め春琴時代よりかえつて門下が賑わつていた滑稽こっけいな事は佐助が弟子に教えている間春琴は独り奥の間にいて鶯うぐいすの啼く音などに聞き惚ほれていたが、時々佐助の手を借りなければ用の足りない場合が起ると稽古の最中でも佐助々々と呼ぶすると佐助は何を措おいても直すぐ奥の間まへ立つて行つたそんな訳わけだから常に春琴の座右を案じて出教授には行かず宅で弟子を取るばかりであつた。ここに一言すべきことはその頃道修町の春琴の本家鴟屋の店は次第に家運かたむが傾きかけ、月々の仕送りも途絶えがちになつていたのであるもしそう云う事情が

なければ何を好んで佐助は音曲を教えようぞ忙いそがしい合間を見つつ春琴の許もとへ飛んで行った片羽鳥は稽古をつけながらも気が氣でなかつたであろうし春琴もまた同じ思いになやんだであろう

○

師匠の仕事ゆずを譲り受けて瘦やせうで腕ながら一家の生計を支えて行った佐助はなぜ正式に彼女と結婚しなかつたのか春琴の自尊心が今もそれを拒こぼんだのであろうかてる女が佐助自身の口から聞いた話に春琴の方は大分気が折れて来たのであつたが佐助はそう云う春琴を見るのが悲しかつた、哀あわれな女気の毒な女としての春琴を考え

ることが出来なかつたと云う畢ひつきよう 竟きやうめしいの佐助は現実に眼を
 閉じ永劫えいごう不変の觀念境へ飛躍ひやくしたのである彼の視野には過去の
 記憶きおくの世界だけがあるもし春琴が災禍さいかのため性格を変えてしまつ
 たとしたらそう云う人間はもう春琴ではない彼はどこまでも過去
 の驕きやうまん慢まんな春琴を考えるそうでなければ今も彼が見ているとこ
 ろの美貌びぼうの春琴が破壊はかいされるされば結婚を欲しなかつた理由は春
 琴よりも佐助の方にあつたと思われる。佐助は現実の春琴をもつ
 て觀念の春琴を喚よび起す媒ばい介かいとしたのであるから対等の關係に
 なることを避さけて主従の礼儀を守つたのみならず前よりも一層おの己
 れを卑下ひげし奉公の誠を尽つくして少しでも早く春琴が不幸を忘れ去り
 昔の自信を取り戻もどすように努め、今も昔のごとく薄はつきゆう給あまに甘ん

じ下男同様の粗衣粗食そいを受け収入の全額を挙げて春琴の用に供した。その他経済を切り詰めるため奉公人の数を減らし色々の点で節約したけれども彼女の慰安いあんには何一つ遺漏いろうのないようにした故ゆえに盲目になつてからの彼の労苦は以前に倍加した。てる女の言によれば当時門弟達は佐助の身なりが余りみすぼらしいのを氣の毒がり今少し辺幅へんぷくを整えるように諷ふうする者があつたけれども耳にもかけなかつた。そして今もなお門弟達が彼を「お師匠さん」と呼ぶことを禁じ「佐助さん」と呼べと云いこれには皆みなが閉口してなるべく呼ばずに済まそうと心がけたがてる女だけは役目の都合つごう上そう云う訳に行かず常に春琴を「お師匠様」と呼び佐助を「佐助さん」と呼び習わした。春琴の死後佐助がてる女を唯ゆい一いつの話相手

とし折に触れては亡なき師匠の思い出に耽ふけつたのもそんな関係があるからである後年彼は検校となり今は誰だれにも憚はばからずお師匠様と呼ばれ琴台先生と云われる身になったがてる女からは佐助さんと呼ばれるのを喜び敬称を用いるのを許さなかつたかつてる女に語つて云うのに、誰しも眼が潰つぶれることは不仕合わせだと思つてあろうが自分は盲目になつてからそう云う感情を味わつたことがないむしろ反対にこの世が極楽浄じょうど土はすうてなにでもなつたように思われお師匠様とただ二人生きながら蓮の台の上に住んでいような心地がした、それと云うのが眼が潰れると眼あきの時に見えなかつたいろいろのものが見えてくるお師匠様のお顔なぞもその美しさが沁しみ々しみと見えてきたのは目しいになつてからであるその外手足ほか

の柔かさ肌はだのつやつやしきお声の綺麗きれいさもほんとうによく分るよ
 うになり眼あきの時分にこんなにまでと感じなかつたのがどうし
 てだろうかと不思議に思われた取り分け自分はお師匠様の三味線
 の妙音を、失明の後に始めて味み到とうしたいいつもお師匠様は斯道しどうの天
 才であられると口では云っていたもののようにやくその真価が分り
 自分の技ぎり倆りょうの未熟みじゆくさに比べて余りにも懸隔けんかくがあり過ぎるの
 に驚き今までそれを悟さとらなかつたのは何と云うもつたいないこと
 かと自分の愚おろかさが省みられたされば自分は神様から眼あきにし
 てやると云われてもお断りしたのであろうお師匠様も自分も盲目な
 ればこそ眼あきの知らない幸福を味あじえたのだと。佐助の語るとこ
 ろは彼の主観の説明を出でずどこまで客観と一致するかは疑問だ

けれども余事はとにかく春琴の技芸は彼女の遭難そうなんを一転機とし
 て顕著けんちよな進境を示したのではあるまいか。いかに春琴が音おんぎよ
 曲くの才能に恵まれていても人生の苦味酸味を嘗なめて来なければ
 芸道の真諦しんたいに悟入ごにゆうすることはむずかしい彼女は従来甘やかさ
 れて来た他人に求むるところは酷こくで自分は苦勞も屈辱くつじよくも知ら
 なかつた誰も彼女の高慢こうまんの鼻を折る者がなかつたしかるに天は
 痛烈つうれつな試練しれんを降くだして生死の巖頭がんとうに彷徨ほうこうせしめ増上慢ぞうじょうまんを
 打ち砕くだいた。思うに彼女の容貌を襲おそつた災禍さいかはいろいろの意味で
 良薬となり恋愛においても芸術においてもかかつて夢想だもしな
 かつた三昧境さんまいきようのあることを教えたであろうてる女はしばしば春
 琴が無聊ぶりようの時を消すために独りで絃もてあそを弄もてあそんでいるのを聞いたま

たその傍に佐助が恍惚こうこつとして項うなじを垂れ一心に耳を傾けている光
 景を見たそして多くの弟子共は奥の間から洩もれる精せい妙みょうな撥ばちの
 音いぶかを訝いぶかしみあの三味線には仕掛しかけがしてあるのではないかなどと
 呟つぶやいたと云う。この時代に春琴は弾絃ぎこうの技巧ぎこうのみならず作曲の方
 面にも思いを凝こらし夜中密ひそかにあれかこれかと爪弾つまびきで音を綴つづつ
 ていたてる女が覚えているのに「春鶯しゆんのうでん囀うでん」と「六の花」の二
 曲があり先日聞かしてもらったが独創性に富み作曲家としての天
 分きちを窺き知ちするに足りる

春琴は明治十九年六月上旬より病気になつたが病む数日前佐助と
 二人中前裁なかせんざいに降り愛玩あいがんの雲雀ひばりの籠かごを開けて空へ放つた照女が
 見ていると盲人の師弟手を取り合つて空を仰あおぎ遙はるかに遠く雲雀の
 声が落ちて来るのを聞いていた雲雀はしきりに啼きながら高く高
 く雲間へ這はい入りいつまでたつても降りて来ない余り長いので二人
 共氣を揉もみ一時間以上も待つてみたがついに籠に戻らなかつた。
 春琴はこの時から怏おうおう々として樂しまず間もなく脚氣かっけに罹かかり秋に
 なつてから重態おちいに陥り十月十四日心臓麻痺しんぞうまひで長逝ちようせいした。雲雀
ほかの外に第三世の天鼓を飼つていたのが春琴の死後も生きていたが
 佐助は長く悲しみを忘れず天鼓の啼く音を聞くごとに泣ひまき暇ひまがあ
 れば仏前に香こうを薫くんじてある時は琴をある時は三絃を取り春鶯囀はるを

弾いた。それ縉めんばん蛮ばんたる黄鳥は丘きゅうぐう隅ぐうに止ると云う文句で始
 まっているこの曲はけだし春琴の代表作で彼女が心しんこん魂こんを傾かたむけ尽
 したものであろう詞は短いが非常に複雑な手て事ごとが附ついている春琴
 は天鼓の啼く音を聞きながらこの曲の構想を得たのである手事てごとの
 旋せんりつ律りつは鶯こおの凍こおれる涙なみだ今いまやとくらんと云う深山みやまの雪ゆきの※とけそめる
 春の始めから、水みづ嵩かさの増ました溪けいりゆう流りゆうのせせらぎ松しょうらい籟さいの響ひび
 き東風こちの訪かすみれ野山かおの霞かお梅うめの薫かおり花はなの雲うみさまざまな景色けしきへ人を誘うい、
 谷から谷へ枝から枝へ飛び移うつって啼く鳥の心を隠いんやく約やくの裡うちに語かたつ
 ている生前せぜん彼女かのうがこれを奏そうでると天鼓てんこも嬉き々きとして咽のど喉のどを鳴ならし
 声こゑを絞しぼり絃しんの音色しんそくと技わざを競あった。天鼓てんこはこの曲を聞きいて生なれ故郷こきやう
 の溪谷せきこを想おもい広々ひろひろとした天地てんちの陽光やうがくを慕したったのであろうが佐助さすけは

春鶯囀を弾きつつどこへ魂を馳はせたであろう触覚の世界を媒ばい介かい
 として観念の春琴を視詰みつめることに慣らされた彼は聴覚によつて
 その欠けつ陥かんを充みたしたのであろうか。人は記憶を失わぬ限り故人
 を夢に見ることが出来るが生きている相手を夢でのみ見ていた佐
 助のような場合にはいつ死し別わかれたともはつきりした時は指させな
 いかも知れない。ちなみに云う春琴と佐助との間には前記の外に
 二男一女があり女兒は分ぶん媿べん後に死し男児は二人共赤子の時に河か
 内の農家へ貰もらわれたが春琴の死後も遺わすれ形見には未練がないらし
 く取り戻そうともしなかつたし子供も盲人の実父の許もとへ歸るのを
 嫌きらつた。かくて佐助は晩年に及び嗣し子しも妻さい妾しやうもなく門弟達に
 看護されつつ明治四十年十月十四日光誉春琴恵照禅定尼の祥しやう月がつ

命きめいにち日に八十三歳と云う高こうれい齡で死んだ察する所二十一年も孤独
 で生きていた間に在りし日の春琴とは全く違つた春琴を作り上げ
 いよいよ鮮あざやかにその姿を見ていたであろう佐助が自ら眼を突いた
 話を天てんりゆうじ竜寺の峩がさんおしょう山和尚が聞いて、てんしゆん轉瞬ないげの間に内外を断じ
 醜を美に回した禅機を賞し達人の所しよい為に庶ちか幾しと云つたと云うが
 読者諸しよけん賢は首しゆこう肯せらるるや否や

(昭和八年六月)

青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学014 谷崎潤一郎」筑摩書房

2008（平成20）年4月10日第1刷発行

底本の親本：「谷崎潤一郎全集 第十三卷」中央公論社

1982（昭和57）年5月25日

初出：「中央公論」中央公論社

1933（昭和8）年6月

※表題は底本では、「春琴抄《しゅんきんしょう》」となっております。

入力：kompass

校正：酒井裕二

2016年1月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春琴抄

谷崎潤一郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>